少年

五月發行

第百五號

東京園之社

女鑑第百五號 目録

綾部道弘の妻



女子の高等教育

女子の高等教育。教科の種類、及び教育の方法にわたりては、論ずれば、さま〴〵と、數千言の說もあるべきなれど、其の教育の性質に就きては、唯、必要といふ一言より外は無かるべし。もとより、今日の世に、現に女子の高等教育と稱せられ、女子の高等教育として、實行せられてあるものを以て、とか斷言するにはあらず。おのれは、今日の女子高等教育の方法には、意見なき能はざるものなればなり。唯吾人が此處にいふは、女子に高等の思想觀念を養ひ、女子に高等の智識藝術を敎へ、女子に高等の品格態度を作り、眞に、女子をして、高等の女子たらしむるべき高等教育といふものを以て、女子の高等教育とし、女子の必要なる高等教育と斷言するなり。

或はいふ。女子に學問の要なし。女子に高等教育の要なし。昔は女庭訓一部を以て、女子の教育、こと足りたり。かばかりにて、女子の德育智育、共に反て今日よりは

圓滿なりしならずやといふあり。誠に然り。されど、時世といふことを考へざるべからず。社會の狀態を察せざるべからず。その上の社會時世は、今日のとは、黑白の相違あり、雲泥の差別あり。その上のさまにては、その敎育にて、事足りしなり。されど、今の世の中は、智識の世の中なり。智識競爭の世の中なり。智識の優れたるは勝ち、智識の劣りたるは敗れ、智識の高きは上り立ち、智識の低きは下りも仆るゝといふ世の中なり。今の世の中に、人とし立つ者、智識は有たざるべからず、つとめて優れたる智識、高等なる智識を具へざるべからず。然らざれば、世の中の競爭場裡に、よく勝つこと能はざるなり。世の中ま、よく立つこと能はざるなり。而して、この優等なる高等なる智識は、何にたよりてか、知覺すべき。これも細に論ぜんには、いろ／＼の道は、あることなれど、とにかくに、敎育の力にたよるべし。則ち、高等なる敎育の力にたよらざるべからず。故に、高等敎育は、かくても必要なるものなり。

而して、智識のみにあらず、智育のみにあらず。道德も優れざるべからず。高尙ならざるべからず、即ち、德育も高尙優等ならざるべからず。すべて、思想觀念皆高

尙優美ならざるべからず、人の心は、水の如し。水は、これを入るゝ器によりて、圓ともなり、角とも成り。又これがゆく境遇によりて、淺くも成り深くも成り、また、澄みもまさり、濁りもはて、また、廣くも、狹くも、大きくも、小くも成るものなり。なほ、人の心の、敎育と境遇によるか如し。人の心たるや、實に、これを置き、これを導く敎育境遇によれり。敎育境遇の高等なるものは、自ら思想觀念道德智識皆高等なり。否高等ならずんはあるべからざるなり。かくて、高等ならざるは、其の人たゞ、まことの心なきが故に、迷へるのみ。誤てるのみ。踏みたがへるのみ。自然に反むけるのみ。境遇敎育の高尙にして、いかでか思想觀念智識の高尙ならざるべき。これに在り、これをうけて、これを得ざるは、其の人、誠心の足らざるが故なり。無きが故なり。かゝる人は、遂に人として論ずべき者に非らざるなり。

世の中の人の、思想觀念智識才能、共に高尙優美なるを要するは、なほ、器械道具の優美精緻ならずんばあるべがらざる如し。器械道具を見よ。さま〴〵なるが中に、よくうつくしく、精しく優れたる方、よく功あれば、よく用ひられゆきて、粗なる

劣れる方は、遂に廢めらるゝなり。これ優れたる器械は勝ち、劣りたる器械は敗北するなり、人とても然り、而して、器械も優等なるは、其の組織の優等なるなり。やがて、これを製するに、物質、細工の優等なるが故なり。優等なる考案結搆を究めたるが故なり。故に、人も、また優等たらむには、高等の驗究指導教育を要すること、かばかりの例めしにても、自ら知るべきことならずや。高等教育は必要なり。ましてや。此の高等なるべき人間の母となるべき女子に於てをや。女子の高等教育、かくて必要なり。然れども、當時の女子社會を見るに、高等教育を受けたる方、反て、女子たる品格の下れる如きけしきあり。かくては、高等教育の不必要なる如し、否、有害なるものゝ如し。はたして、高等教育の性質は、斯くの如きものなるか。これ、畢竟、女子が女子の本分を忘るゝが故なり。女子が高等教育を受くべき志の立たざるが故なり。女子が高等教育を要するは、何の爲めにあるかを知らざるか故なり。何ものが、女子の本分として、きはむべく、磨くべく、學ぶべく、知るべき高等教育なるかを誤てるが故なり。其の着眼の誤てるが故なり。其の方法の誤てるが故なり。女子が高等教育を要するは、即ち、女子の本分の高等なるものを知らん

ためなり。ます〳〵高く美しく女子の本分を知り守り爲し盡くさむためなり。女子の本分とは、何ぞ、忠君愛國の日本臣民たる者の誠の母となるべきにあり。こゝにあらずして、日本の女子たる者、他に何の本分あらむ。女子諸君一顧せよ。而して、吾人は女子の高等敎育に從事する者擔任する者に向ては、再三再四の顧慮を要するものあり。即ちこれが敎科方法などに付てなり。然れどもそは他日に讓る。

歸雁

春花はさくらさいへれさ
あなたへさすかたいきそ
そなたのみおもひたつらん
聲かはし霞につれて
春花のさくもがひなし
いたづらにして

僭辨玉

ふく風はこちさいへれさ
こなたにもは心もさめす
鳴きつれて雲居にかくれ
つれもなく歸る雁には
ふくかせのこちさいふ名も



三德の說

宮地嚴夫

三德とは、智と仁と勇との三を云ふなり。智とは何ぞや、智とは人の心靈の光明を云ふ、心靈の光明、物の醜美眞僞を知り分ること、鏡の物を照すが如し、故に鏡を智の象とす。勇とは何ぞや、勇とは人の心靈の決斷を云ふ心靈の決斷、事の理非善惡を斷ち定むること、劍の物を切るが如し。故に劍を勇の象とす、仁とは何ぞや、仁とは人の心靈の德澤を云ふ。心靈の德澤、玉の温潤含蓄の氣の滿たるが如し。故に玉を仁の象とす、凡此三のものは、吾人人類の、其一をだも、欠こと能はざる所のものなり。如何となれば、人若智無くんば、何を以てか善惡邪正を判せん、勇無くんば、何を以てか利害得失を決せん、仁無くんば、何を以てか道義を全せん、是此三德の一も缺可からざる所以なり。

皇祖天照大御神の、皇孫邇々藝尊を、天下に君臨せしめ給ふに當りて、八咫鏡、叢雲劍、八坂瓊曲玉の三種を授け給ひて、之を皇位の天璽と爲し給ひしも蓋此意の外ならざるべし。是を以て、我歷朝の聖皇の天下を統御し給ふや、即ち此三德を以て、臣民に君臨し給ひ、又臣民の皇室に奉仕するや、必ず此三德を以て、之を事へ奉らずと、云ふこと無し、此即ち我寶祚の隆、當に天壤と共に無窮なる所以とす。是を以て、凡吾人人類の此世に在るや、特り此聖皇の天下に君臨し臣民の皇室に奉仕するのみに止まらず、其相互の上に於ても、亦此三德に依らざるを得ざれば父兄の子弟を養成し、子弟の父兄に從事するは、云ふ

を得ず、夫婦に於るも之に依り、朋友に於けるも亦之に依らざるを得ずして、此智仁勇の三の心靈に於るは、恰も衣食住の三の形體に缺可からざるが如し、形體に於て、若衣食住の內、其一をだも之を缺ば、何を以てか此身を保たん、然れば心靈に於て、智仁勇の內に、缺る所あらば、其德義を全すること、能はざるは、蓋云ふを待ざるならん。然れば、

皇祖天照大御神の、皇孫邇々藝尊に、授け給へる、三種の神器は、特り皇位の天璽たるのみならず、凡皇民たるものは、此三種の神器に含める、三德の義を悟り得て、事に觸れ物に當るごとに、輕忽にすること無く、必ず智慧の鏡に照して、能く其善惡邪正を明かにし、又勇氣の劍を鈍らずして、能く其利害得失を、判斷して之を決行し、彼美德の玉に毀けずして、能く完全無缺の行義を保つべし、之を三德を全うすると云ふ、即ち皇民たるの本分を盡す所以なり。然れば鏡劍玉の三寶、智仁勇の三德は即ち、無上至尊の道を表はすものなり。絕對無偶の法を發するものなり。故に君上之を全うすれば、天下を泰平ならしめ、家主之を全うすれば、其家を繁榮ならしめ、已人之を全うすれば、其身を安寧ならしむ。嗚呼智仁勇の三德は、人類の至道、天下の至寶なり。如何ぞ之を知らざるべき、今聊感ずる所ありて、此三德の說を作る。

女子敎育一班（十四）

三輪田眞佐子

女子德育の目的を達せんとならば、先づ學風を尊ぶこそ良けれ。そも〳〵學風とは、女德を實踐躬行せし先進女子の實學をして後進女子を感化することをいふなり。おのれきく深山なる谷間の花はその色鮮かならず。そは日光の感化を受けざればなり。と亦野邊なる藪叢の鶯はその聲麗しからず。そは名鶯の感化を受けしめ

ざれどころも、あはれ無情の草木、無靈の小禽だにかゝるものをいかでか有情至靈の人なるに、感化の著しからぬ理やあるべき。

まことや人はいと感化し易きものなり。否感化せざらんことを望むも、折にふれ物に從ひ、自然感化さるゝものぞかし。古人曰ひけらく、仁者は山を樂しみ、智者は水を樂むと、そは人々固有の性質なれど、寧靜にてゆかしき山は人を仁ならしめ、動きてたえまなき水は人をして智ならしむるやう、感化せしむめり。孟子の居は氣を移すといふも、必竟境遇の感化をいふものならん。

既にかく感化し易ければこそ、學風を尊ぶこと必要なれ。もしこの學風に心を用ゐずして、人を敎育せんか、定見あり節操ある人を作るを得じ。聞く北方の地は陽春の感化を受ること弱ければにや、梅も櫻も將た桃も、時を分たず、一時に咲く奇觀を顯はすとかや。人もこれと等しく定りし學風に感化されざるときは、身のほど〲を知らざるものとならむ。近來女子の敎育あるものは、男子らめきたりとか、女子らしからずとか、樣々の批評あるは、その原因女子らしき學風の感化を受けざるによるならむ。見よ鸚鵡猩々能くものいふも人類にあらざる所以は、見識なうして人語を眞似するのみなればにあらずや。今日の女子敎育も徒に口をもて、理を敎へ、目をもて文を讀ましむるのみならんか、女子の心事を修むるに何の益かあらんや。

されど眞正の敎育を施さんには、是非學風を盛にして先覺者の任にあるもの、心を以て心に傳ふ決心にて、朝な夕なその言ふこと、そが規矩となり、その行ふこと、そが準繩となり、以て靑年女子を根底より同化せしむるやう薰陶せざるべからず。はたしてしかせんか、弟子の氣風さながら師君の如くなるべし。今日の女子女德の薄弱なるもの多きは、全くその精神の根本を感

化せざるに由らん。家を砂上に築けば倒るゝことを知るもの、いかでかこの理を悟り難からむ。

元來學風もて人を感化せんには、多く藝を授くるを要せず、將た多く説を聞くを待たじ、唯一種の氣風を精神に通ずれば足らんかし。苟も氣風を通ぜんには敎ふるとき赤心を吐き、恩德を灑がざるべからず。從ひて敎を乞ふものも、亦虛心もて敎訓を受け、師德を心膽に刻むべきなり。露ほどたりとも敎師と弟子の間に隔心あらんには、氣風の通じ難きこと、恰も透明ならざるものに光線を通じ、絶緣したるものに電氣を通ぜんことの益なきが如し、讀者物理學の實驗を見てかゝる眞の理を悟りね。

こゝを以て師弟の間は、極めて親密にせざるべからざること明なり。然るに今日の敎師たるもの、その弟子を見る行路の人に異ならず。弟子も亦敎師を見ること單に近隣の人に接するほどのおもひのみぞすめる。むかし仲弓といふ人病みて籠りける時、その師なる孔丘まどよりその手をとり、いと睦じく慰めけりとぞ。今世の冷澹浮薄なる輩をして夢にだに、斯かる樣を見せばやと感慨し、なほこの惡風次ぎて止まざらんか、行末の空や如何ならんと、憂苦すれば覺えず淚袖を濕すばかりになん。

思ふにかゝる風潮の源は、わが國の社會俄に繁くなりて、私塾すたれ、學校代り、創業の間とて勢、師弟の關係、疎遠となりしによらん。むかし加賀の千代とて俳諧に妙なる女ありけり、始めその道に志すや、良師を求めばやとおもふ折から、美濃の盧元坊とてその道の名人、行脚して千代女の里近く來りしを、幸と直に元坊をたづね敎を願ひければ、元坊の言ひけるやう、一句を試に示しね、題は時鳥をと、よりて千代女一句を詠ぜしに、こは見るに足らずと。次ぎて一句を讀みしに、亦顧みずして元坊、眠に就きてけり。もし千代

女にして凡庸なりせば、失望して退くべきに、さあらで獨り沈思し遂に(ほとゝぎす〳〵とて明けにけり)の句を得にけり。ころは東雲あからみて、朝を告ぐる烏の聲さへ聞ゆれば、元坊始めて千代女に弟子たることを許しけりとかや。蓋しむかしは一能の師を求むるだに、かゝるものを況て徳行の師を得んには如何したりけん。

(正誤)女鑑第百三號に掲げし 女子教育一斑には如何なる故にや陽明のことに付時代なとにいみしき誤あるに[illegible]左の如く改む。

(明の時代に陽明といへる學者ありて知行合一といふ説を唱へて一派をなせり我國にても 中江藤樹熊澤了介三輪執齋等の諸先生は其の學派なりとかや)

一念し
いはなも
さほす

綾部道弘の妻



塩井ふく子

如何に世をかこつとも、世はもとよりうき世、いかに身をうらむとも、人はうき世をわたる舟、辛き事、くるしき事のあるは、もとよりの事なれば、何事もおのづからなる事とあきらめて、たゞ人の人たるの道にたがはぬを以て、足れりとせんこそ、心もすみ、思ひもはるゝわざなれ。綾部道弘の妻、志知と云ひて、小林政次といふ人の女なり。此の志知なるものこそ、やがてよく天の理をさとりたるものなれ。家には食客のたゑぬもいとはず、身は十五年の年月、病に苦るしめら

るゝも、さばかりに歎げかで、たゞ孝子の傍らに侍るをよろこび、花に詠じ、月に吟じて、心の常に爽快なりける、誠に世のつねの女子にはあらざりけり。

綾部道弘は豐後杵築の人なり、道弘の先は、丹波國綾部といふ所より出でたれど、とりて氏の名とせり。子孫豐後に移り住みて、大友氏に仕へぬ。大友氏封をうしなふに及び、祖父可春、父道一、皆隱居してまたつかへず。道弘は天資剛直にて、幼き折り、叔父の家に養はれしに、叔父なる人は、道弘の稚弱なるをあなどり輕んじて、待遇頗る禮を缺きしに、道弘は大にこゝろよからず思ひ、或る夜ひそかに曠野幾里餘の處をこえて、家に歸りぬ。時に年わづかに八歳、父母いたくその膽の大なるにおどろきしといふ。それより家にて撫育せられ、古文數百言を授くれど、一度にてよく悟とり、よく暗誦して、再び繰り返す事なかりしが、里に良師なく、家遊貧に乏しく、千里の馬をして、いたづらに槽櫪の間に老いしめん事を、父なる道一は、つねに嘆せしとぞ。十七歳にして父を失ひ、日夜哭泣して墓側に廬し、みづから沙石をはこびて、墳をつくりしは古人に恥ぢぬ行といふべし。弱冠にして鄕邑に仕へ、時々歸省し、折りあれど書をよみ、醫を習ひて、母なる人に孝養をつくしぬ。

此の道弘の妻なる志知も、また、おなじ豐後杵築の人なり。十五歳の時、父を喪ひ、かなしみ嘆く事禮に過ぎたりとぞ。長兄の三友といふものに鞠せられ居りぬ。三友樂を好み、書をよむ、志知も又やゝ詩文等に通じ、よくおのづからの義理を悟り、しかも資性温順なり。道弘は三友と同僚の中にても、よく心合ひたりけれど、志知を以て妻となしぬ。

たまゝゝ道弘の兄なる人、長き病にかゝりて資產も乏しくなり、田宅等をも失ふに至るを見て、道弘は歸り來りて、杵築の城主に仕へ、其年俸を分ちて田宅を贖

ひ、逋税を償ひ居りしが、あはれ、遂に藥石の効なくして、二人の稚子をおきて世を去りぬ。道弘は大にかなしみ、其二子を引き取りて養ひしに、志知もまた夫のこゝろに感じて、これを撫育する事巳れの子に異ならず。曾て母なる人、道弘を慕ひて、兼て家に來り居りしが、志知また心を盡くして、やさしくつかふれど、志知の生みたる二人の女子も、またその母のこゝろに從がひて、心ばへさへ柔しく、二人の寓客をも誠の同胞の如くにむつみしたしみ、一家和合していと賑はひしとぞ。嗚呼家の和合は、主人の心懸にもよれど、多くは婦人の身によるものなり、志知の賢知るべきのみ。一子安正、字は伯章、またの字惟木、綱齋と號するものあり、初め父につきて學び居りしが、少しく長ずるにおよび、京師に遊ばしめて、伊藤東涯、北村篤所などにつきて、經史をよましめ、朱子の學ををさめしめぬ。性又父の剛直をつぎて、しかも謹しみ深く、親につかへて其心をいたしぬ。後勤番となりて、江戸に赴きけるが、道弘が曾て遺りし書に、予は蓬蒿の間に生長し、しば〳〵艱苦を嘗め、心、聖献を存すれども、いまだ夙志をはたさず、願はくは再び人に生れて志を遂げん。汝が母をめとりて、二女を生み、男の子には汝ありて、年已に强壯、我ははや老衰せり。思ふに汝の成立を見ん事叶はざらん、されど、今汝學をつとめ居れど、わが願ひはたりぬ。汝が親につくせること、いと大なり。そも道とは人倫に外ならず。徒らに空文に馳する事なく、以て日用を達せよ。凡て事、義を害するなきものは時俗に從ふべし。みだりに國禮に違ふ事なかれといへりけるに、親友之を覽て、いたく感じて涕涙をおとしゝとぞ。道弘病にかゝりし折、安正江戸にありて、その職にかゝはりて暇を乞ふを得ず、其友伊藤信益といふ人、たま〳〵來りけるが、道弘これに言傳ていひけらく、余病已にはげし、汝と長

くわかるべし。私情を以て、公義を欠くべからず。もし必ず歸省せど、必ず不孝の子とならん。論語は今古の常經なれど、一日も讀まざるべからず。さきに書きて與へし謙卦の辭は、汝之を守るべし。世に孝より大なるものなしといへりけるとぞ。遂に元祿十三年に空しくなりぬ。志知はこれよりさき母をもうしなひ、今又夫にわかれて、悲しさやるかたなく、少女をたづさへて伊勢に詣でしに、其冬中風にかゝりて、腰たゝずなりぬ。その後、安正、杵築に歸りて家を繼ぎ、日々母の膝下に侍して孝養をつくせしに、志知は大によろこび、父の遺言廢すべからずとて、日毎に經史をよましめ、二女等にも古の詩文、および歷史傳記等を誦せしめ、病のうさをも忘れて樂しみしといふ。客ありて論說すれど、いたく喜びて、晷のうつるをも知らず、花月には雅賓を招ぎて詩を賦し、歌を詠じなどし、安正が人に招れて、歸り來れど、如何なる談をかなし、詩はつくりしや否やなど問ひ、子弟などに、たま〱詩を賦するものあれど、かならず懇ろに吟弄し久しく病むと雖も、精爽にしてつゆみだれず、恬靜無爲にして世を送れり。かくて、正德の元年といふに、六十三歲の齡にてはかなくなりぬ、號を良淑と曰ふ。最期の時に臨みて、また言談せず、佛號をも唱へず、平生にもかつて三世の事を問はず、たゞ何事もおのづからに、唯一筋の道をたがへぬ事をつゝしみしといふ。天性雅潔、花を植ゑ、石をうつし、また籠禽を喜ばずして、百鳥の樹木になれ囀づるを見聞するを愛し、これわが籠中のものなりとて、少女等に指さし示せしと云ふ。また、或時、人より子供にとて彩服を遺られぬ。而るに道弘之を着するを許さずして曰く、先君素貧、吾れまた辛勤する事年久し、幸に俸貲を享け、兒女等を暖に養ふ。是れ君のみめぐみなり。まして人情、儉にはなりがたく、奢にはうつり易し。予兒を愛せざるにあ

らず、奢を習ふを欲せざるなりと。志知もまたよく此の心に從がひて、よろづ儉約をまもり、兒女等にも日來いましめしとぞ。また一日、婢女あやまりて熱湯を薦め、指頭はと〳〵ただれんばかりなり。志知なほ器を持ちて婢を呼ぶ、少女まさにくしけづり居りしが、是を見ていそぎ取りあげ、婢のつゝしまざるを叱り、など速に投げ給はぬといひしに、志知笑ひて、いかなれどさるこゝろなき事いふやとて、又とはざりき。其實柔にして思ひやりの深きこと、これを以て推すべし。子安正よくその喪を心よりつとめ、父と母との志をつぎて、身は郡の代官となり居りしが、少しもよこしまなる行なかりしとぞ。後闕西凶年ありし時、安正の譏世に容れられず、退去して自ら守り、經義を講說して自らたのしめり。寛延三年に世を去りぬ。年七十五、門人是を諡して有終といへり。二子安胤、剛立、また學を好み、槍を習ひ、父の後を受け終世僻らざりしとぞ、げに此の親ありて、此の子あり。志知子の如きは、家庭の鏡とおもふまゝに、飯田翁の筆のおもかげを、つたなき筆にうつしかへつ。

一色義範の妻

山川清素

れのが身一つにおもひあまりて、兎やせむ角やと心は千々に碎くる苦しき場合にも、身は生死の淵に葬られて、引きもならず進みもかねて胸はひたとふさがる悲しき境界にも、綽としておもてはさあらぬさまに裝ひて、雪間をもるゝ梅花一輪、ほのかにしるゝばかりの香と共には、ゑめるなづかしの姿は、世の常の女のたやすく爲し得がたきことにはあめれど、せめては日頃心におもひ構へて、其の場に臨みてうろたへずさわがぬぞ女の身のたしなみなる。

豺狼牙をならして前に迫り、毒蛇舌をはきて後にわだ

かまり、進むもその飽くなき腹にあたらしの身を寸斷せられ、退くもそのおそろしの毒氣にきよらの身を殘害せられたるべきを、外に一條の活路を得て能く其のはづかしめを免れたるは一色義範の妻なりけり。」

一色義範の妻、其の名と其の出所との逸したるは口惜しけれど、其の貞操のはげしきと、其の决心のかたきとは、朝夕所定めぬ浮草の浮きたる心の女を愧死せしめ、僅のことに所を失ふ女心を戒めて、千歳の後猶凛として香はしきを覺ゆるなり。

なよ〳〵かなるものから、一しほ風にさいなまるれど、柳は猶柳たるを失はず、一色義範の妻、心は千鍊の鐵にもくらべつべきものながら、貌は柳の如く寄らば靡かむさまを、一度かいまみて煩腦の鬼むらむらときざして、天の下は吾が物とふるまひたる室町公方義教も、之のみにはそゞろ心をいためけむこそあさましけれ。

一度くるひそめし意馬心猿のきづなは、何所までも止めむやうなくて、時々いひよすれども、元より夫ある身のいかでか靡き從はむ、天下を御する將軍の威も之には旋すべきすべなくて過しぬ。

義範役に就きたる一年、妻は唯ひとり空閨を守りて、朝夕夫の旅路をおもふに暇なきをりしも、義教はこのまにこそとて使をやりてしきりに是を招かむとしけり。

妻は日頃いまはしとおもへる公方の使とき〻て、身をふるはしていみおのゝき、病にかこつけて、一期の危厄今こゝに迫りきたるを如何にもして免れむとしたれども、やみ〳〵思ひ止まらぬ公方の心、今は爭ふべきすべもなし。いでや、さそふ嵐には散るこそ花のねがひなれど心ばかりはかくてもたゆまぬ義範の妻、おもひきはめたる胸を据ゑ、迎ひの輿に搖られつゝ自死地へと身を投じぬ。

かくてもわれは一色義範の妻、いかに天下の公方なれ

ばとて道ならぬことゝしりつゝ、やみ〳〵主君と賴みて此の世をやすく渡らるべき、さりとて吾も婦道の片はしは心得たる身、たとひ、人ならぬことせらるとても將軍は猶天下の將軍、吾が家の主君、若これに從へば將家の德をそこなふことのあるのみならず、夫の名をけがし、妾が操を破ること尠からじ、今はわが身一つをなきものにして三の大事を救ふに如かじと心の内竊におもひ定めていで立ちながら、流石女心のさゝ波は沈めむよしもなし。せめてわが夫だに家にましますほどならば、かゝる憂目は見もならひもせざらましを、吾が夫のなきをうかゞひての人もなげなるこの振舞、あまりといへば腹立たしの限りやと、道すがらおもひつゞくれば、胸にせまる苦しきことのみに閉られて、若も我が夫の後にてかくと聞きもせば、いかばかりくやしがりたる末、いかなる大事のおこりやすらむ。生きて恥あり、死して恨おほき我が身は何とすべき。とてもかくても長かるまじき將家と共に亡ぶる吾が家は是非もあらじ。吾は唯夫に先づばかりが不貞なれば、死して夫を辱めぬぞ妾がとるべき道なめると口惜しの刄をひきぬきて、輿の内に倒れたるぞ萬代を通じて女たるものゝ摸範なる。

あはれ。男とさへ生れいでなば、かゝる戰國割據のならはしとて、すはといへば立所に楯を負ひて主君といへども、刄をあつべき世の中に、女と生れたるはかなさは、いなみも得せぬのみならず、力と賴まむ夫は戰の旅にいでたちたる心細き中に、斷乎たる心中更に一點の曇りたる所なく、能く其の節を全うしたるは、古往今來ためし稀なる婦道の粹とこそいふべけれ。



家政

いけ花（十五）

田邊和氣子

桃に水仙の活かた

桃は木質和らかにして、活るにかたからざる物なり。眞副とも、直なる枝をゑらみて寸尺を定め、少しため直してとりをつけ、これに順じてあしらひの枝をよき程加へて、十文字にならざるやう



にさすべし。根〆の水仙は、前號にのべしごとく、根元の袴をよき程にときわけ、三本添てよし。いかほど多くさゝまほしくとも三本よりは活ざる規則なり。春になりては花を葉より高くさすべし。

ねこ柳にてうじの活かた

すべて柳は、すなほなるためしにもいへるごとく、木質和らかにして、桃に同じものなり。春あさき頃は花に皮を着てあれど、一つ〳〵手にてとるべし。小枝生



じてよきふりなるを見たて、眞副をいつもの如くして定め、あしらひもよき程に加ふべし。体なるてうじは、花數半にして中窪のかたちにさして、副の下の方へ葉の出ざるやうにすべし。鼠柳といふも、これに同じくして、花稍細かきものなり。いづれも活方に差なきものなり。体の花はてうじに限らず、何花をも用ゆると知るべし。

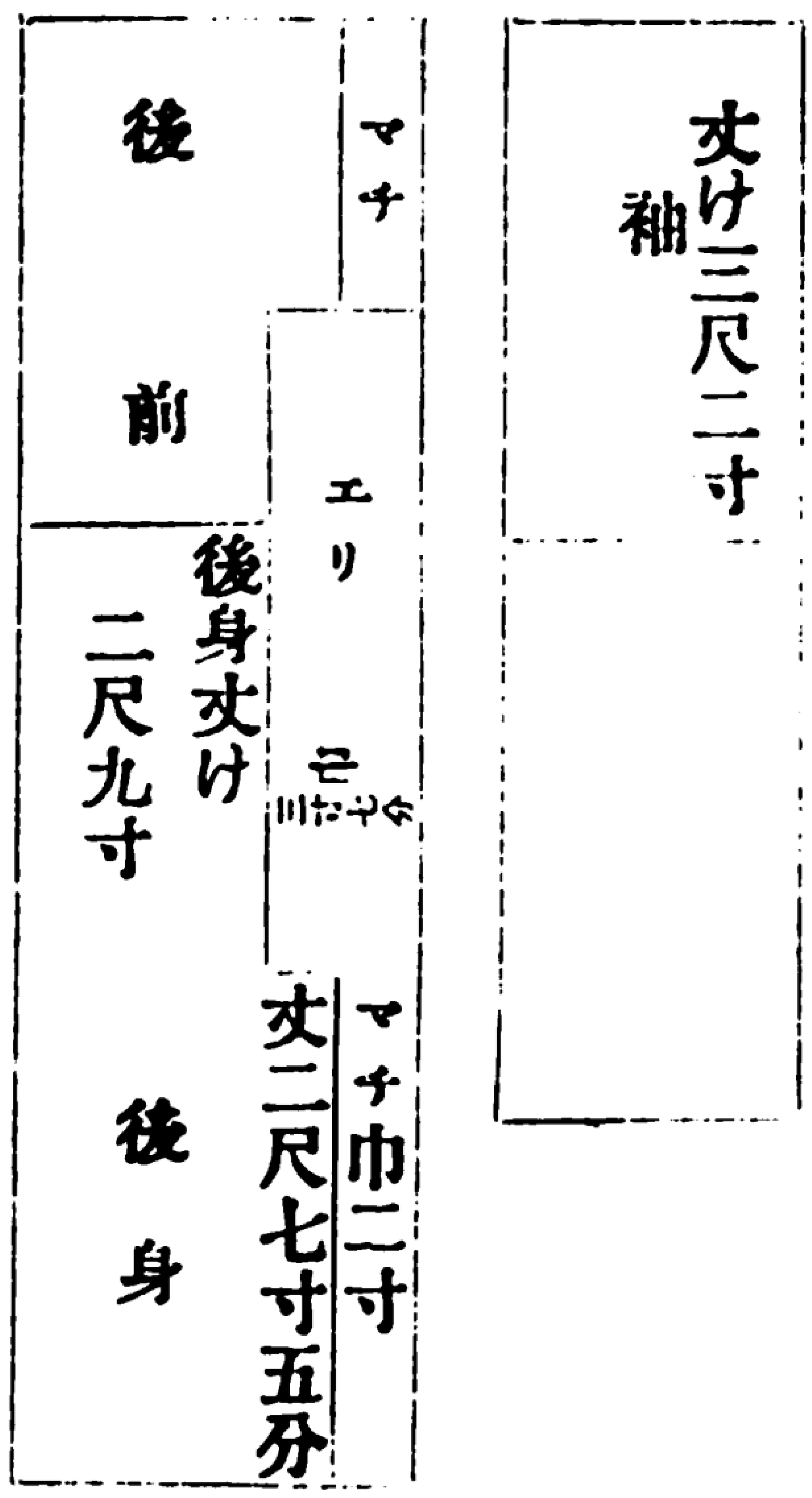
たちぬひ

西山たい子

（廿七）中裁羽織の裁ち方

中裁羽織は、大方、一丈七尺七寸ばかりならで裁てるものなり。

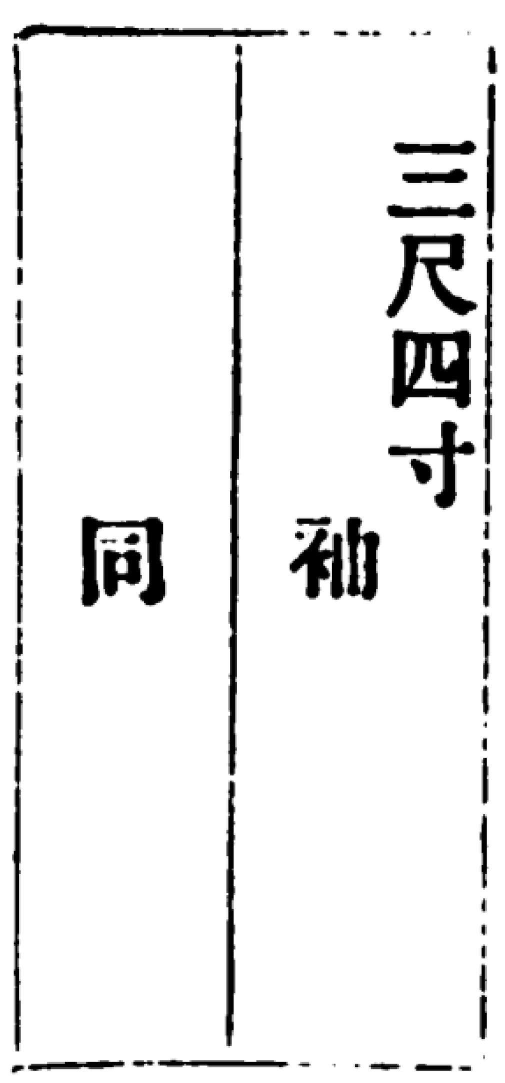
中裁羽織裁ち方



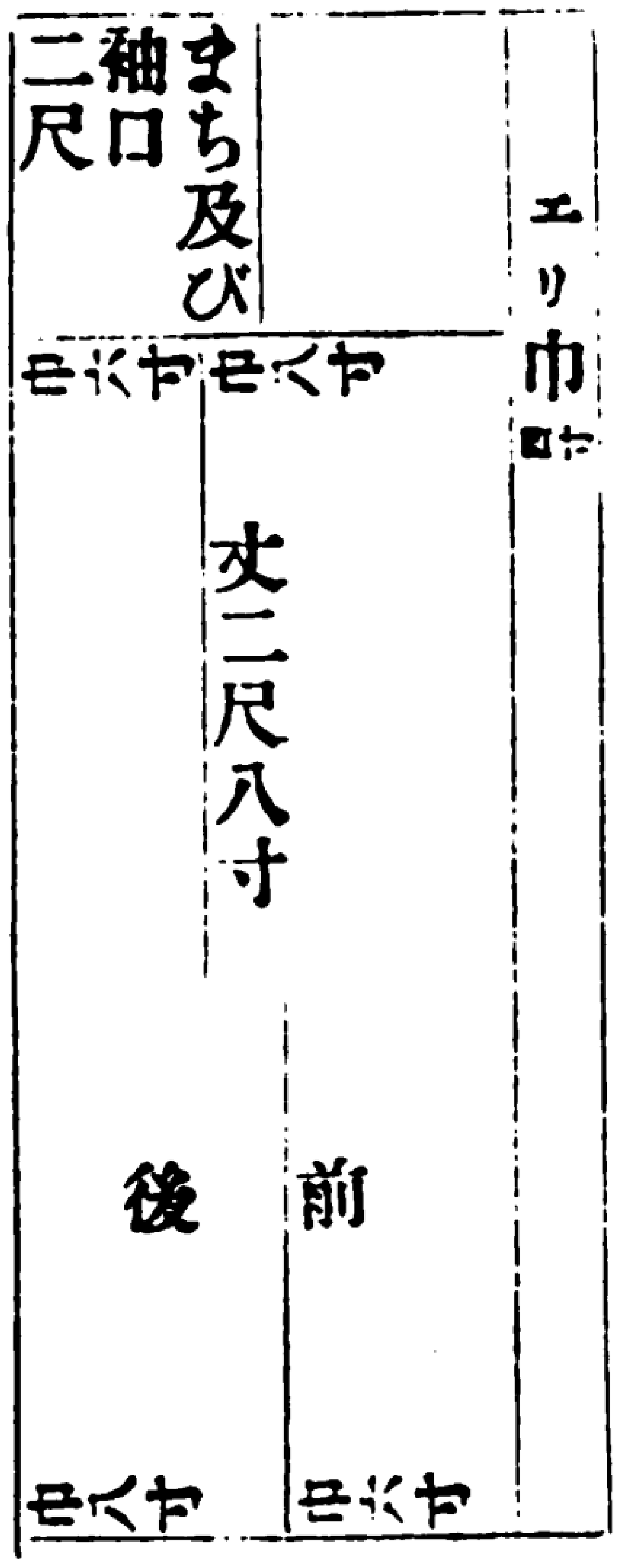
まづ圖の如く、袖丈を、大凡、一尺六寸ばかりとして、その四つぶり、七尺四寸を切りとり。殘りなる一丈三寸のものを、二つに折り、それより、一方を、前下り一寸五分ほど長くして、また二つに折り、その折りたる處を、三寸七分だけ横にきり、長き方を、縦に、眞直に、三寸七分だけかきとり、短き方よりも、また、縦に、二寸だけかきとるべし。而して、短き方は、後の身衣となり。長き方は前の身衣となるなり。また、三寸七分だけかきとりたるものを、眞中にてはぎて、襟となすべし。後ろよりかきとりたる二寸切のものを、襠とすべし。袖口も、それよりとるものなれど、これだけの丈の切れにては、さまでは足らざれど、外の切を用ふべし。然かし、長き切れにて裁つときは、襠の先きより取るべし。縮緬ものなどの巾のひろきものは、一丈一尺ばかりならで、可成大きく裁るものなり。

まづ、巾のまゝにて、袖丈だけをとり、縦に、二つにきりて、兩袖とすべし。その殘りたる切れより、四寸巾のものを、眞直に縦にきりとり、それを襟とすべし。また、その殘りたるより、襠、袖口の切をとりて、殘りを圖の如くして、裁ちて、身衣とすべし。

巾廣物

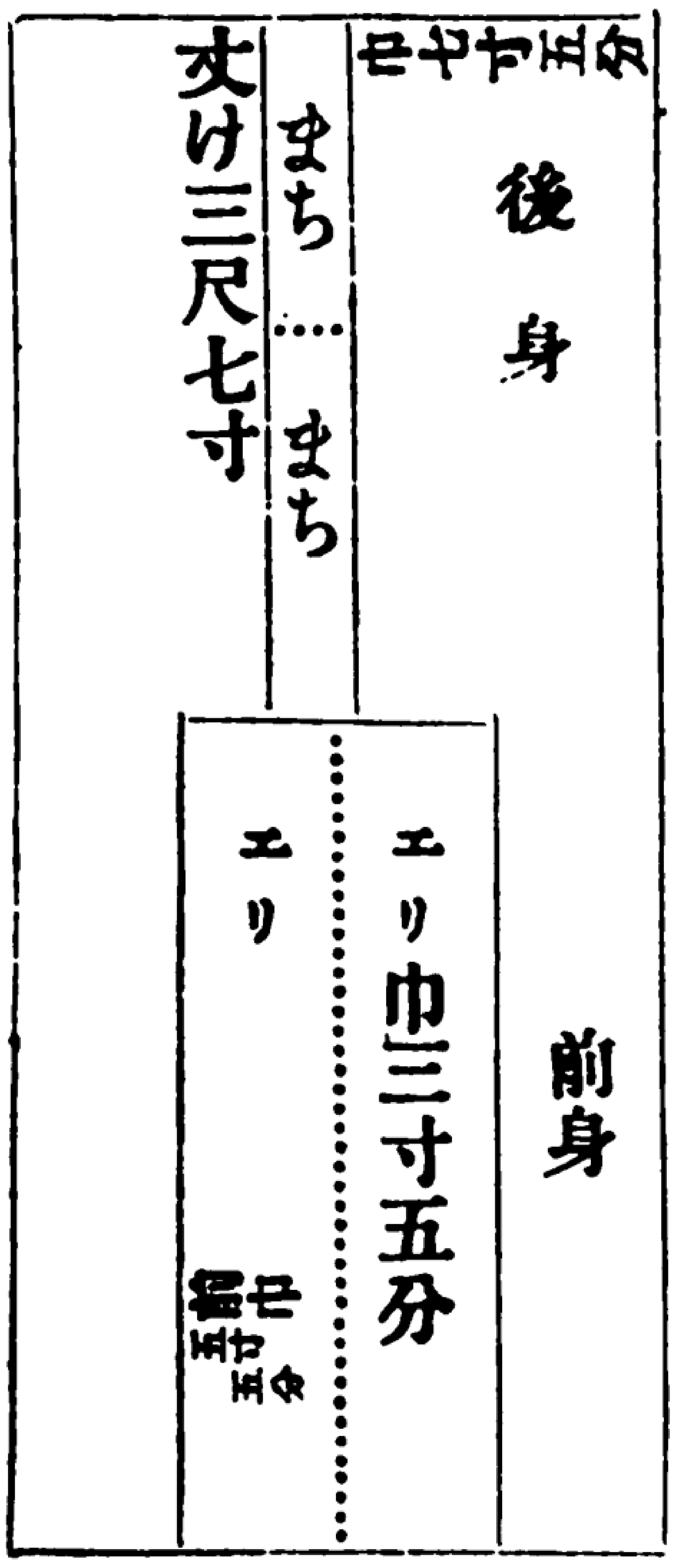


羽織裁方



但し、襠にする處を、今少し短くなして、裏にはぎを入るれば、身衣の方長くなれば、裏へのかへり多くなるなり。

此裁ち方は、兩面の太物に限る。もし、片面のものならば、左の如くにして、裁ちなば宜しからんと思ふ。袖は前の如く兩袖ぶりとりおき、殘りを圖の如くすべし。



但し襟のあまりより、袖口を取るべし。

だいどころ

伏屋の雪

貝の「ハシラ」を能く洗ひ、器に盛り、(器は丼の類を用ふべし)甘酢を掛け、其上に摺芋をのせ、山葵を添て用ふるなり。但し甘酢の製方は前號に記せり。

金海鼠の深山煮

軟なる金海鼠を能く洗ひ、之を木口切となし。味淋醤油にて鹽梅し、鰹節の削りたるものを投じて能く煮上げ、小鉢に盛り、胡椒をふり掛け、扨て別に湯でたる山の芋の皮を剝き之を裏漉にて前の盛りたるものに漉し掛けて用ふるなり。形も味も風致ある調理なり。

松笠烏賊

烏賊をひらきて腸を去り、よく洗ひ、薄皮を剝き、斜

に庖刀目をつけて後、好き程に切りて、熱湯をとほし、之を味淋醤油にて鹽梅したる汁の中に投じ、煮上ぐるなり。扨て附合には獨活又は筍の類を宜しとす。

鱈の甘煮

鱈を洗ひ、四五日間程、水に浸置きて鹽出を爲し、扨て三枚に卸し、肉の部分を能き程に切り、別に獨活の皮を剝き、一寸程に切り、前の鱈に混じ、味淋醤油にて鹽梅し、其煮たるところに鰹節の細かに削たるを加へ、よく攪き交て器に盛るなり。但し木の芽を添へ風味増さしむべし。

鯛のスッポン煮

鯛の鱗を剝き、三枚に卸し、肉を好き程に切り置き、別に慈姑筍牛房の類を湯でゝ、好き程に切りたるを胡麻油にて炒り、更に味淋を加へて、少し煮たる處に、前の鯛を投じ、醤油少量宛を注ぎつゝ、煮上たる後、鰹節の削たるを交ぜ、好き味になるを待ちて器に盛るべし。木の芽を添ふるは前に同じ。

鯛飯

前の如く三枚に卸したる鯛の肉を、四角に切り、鹽をふり掛け、「ザット」湯てゝ置き、扨て常の如く飯を炊き、之を飯櫃に移す。前に湯でたる肉を投じて好く攪き交せ、別に煮出の汁を作り、前の飯を茶碗に盛りたるとき、此汁を掛て用ふるなり。但し香味には大根オロシ又はサラシ葱抔と佳とす。

白魚飯

白魚を洗ひ、鹽をふり置き、扨て飯を常の如くに炊き、火を退くとき、此白魚を飯の中に混せ、飯の出來あがりたるを待ち、前の如く清し汁にて用ふるなり。香味は青海苔、卸山葵の類と知るべし。

鶏飯

鰹節の煮汁に食鹽少量を加へて飯を炊き、別に軟き鶏肉を薄く切り、小椎茸、筍の類を「セン」に切りた

るものと共に、味淋醤油にて煮あげ、飯を移すとき之を交せ合せて用ふるなり。

このごろ

鋤柄義子

このごろ種まくべきもの。

あさ、　ゑごま、　あゐ、　夏大根、
しそ、　たで、　春だいこん、　うぐひす菜、
ゑんどう、　ほうれんさう、　きうり、　とうがらし、
ゆふがほ、　へちま、　にら、　唐もろこし、
もろこし。　西洋ねぎヲニヲンは、今ごろより七月ごろまでまきてもよかるべし。

根をわけ、あるはうゑかふべきもの。

南京ねびね、　をれん、　せんだいはぎ、　かきつばた、
いちはつ、　すししやうが、　菖蒲ぐさ、　せうま、
あひづゆり、　白いぬはぎ、　山吹、　にはざくら、
小でまり、　あじさい、　あふみあじさい、　れたま、
ふくじゆさう、　山ぶきさう、

接木すべきもの、

柿、　かんご、　はせ、　くるみ、

さし木のものは。

梅、　あんず、　びは、

ぶだうは棚をゆひなほし、たねをうゝるも、さし木をするもこのごろなり。

百合には、むねと食ふべきものと、花をもてあそぶべきものとあれど、何れもこのごろほりいだしもし、うゑかへもすべし。いまの内によく手を入れおけば、實いりもよく、花もよくさかん。何事も油だんなきがよし。

十七日はひがんなり。

二十日は春季皇靈祭なり。朝とくおきて、皇居の方に向ひて遥拜せらるべし。かけまくはかしこかれどこの

日朝廷にて、天皇陛下おほみ丶づから　御代々の皇靈を祭らせ給ふ。ありとある臣民、今日のあたりのみか、わが祖先代々　皇恩のつゆにうるほはざるものあらんや。ふかくれもひかへしても、謝し奉るべきなり。たゞ大祭にて休日なりとのみ、あざましく心得たるは愚なり。

學園

日本文典（六）

壚井正男

名詞（なことば）

名ことばとは、すべて、形あるものと無きものとを論ぜず、物事の名をいふ詞をいふなり。例へば、日（ひ）、月（つき）、天（あめ）、地（つち）、雲（くも）、霞（かすみ）、神（かみ）、人（ひと）、虫（むし）、鳥（とり）、獸（けもの）、心（こゝろ）、魂魄（こんぱく）、聲（こゑ）、色（いろ）、日本（にほん）、支那（しな）、朝鮮（てうせん）、戰（たゝかひ）、旅（たび）、業（わざ）、憂（うれひ）、樂（たのしみ）、喜（よろこび）、悲（かなしみ）、などいふ如き類と、また一ッ、二ッ、三ッ、四ッ、五ッ、などいふもの丶數をいふ詞との如きものなり。此の一ッ二ッなどいふ數をいふ詞を數詞（かずことば）といひて、殊更に、別に名詞の外に取り出す人あれど、數をいふ詞は、言語文章の上にて、その振舞ひ、露ばかり、名詞と異る所なければ、おのれは、おなじ名ことばの中に入るゝなり。

おなじ名詞なれど、特別に一個の事物をいふものと、一般に同種の事物を示すとの二種あり。それは世の文法家の語を用ふれば

一、普通名詞

例へば、山（やま）、川（かは）、人（ひと）、犬（いぬ）の如き

類にて、一般に同種類の物に通はせていふ詞にて、殊更に一事一物に限らず、普く其の類に共通すべき詞なり。この中には、また、自ら、いろ〳〵なるあり。そは、夢(ゆめ)、聲(こゑ)などいふ無形の物をいふあれど、石(いし)、木(き)などいふ有形の物をいふありまた、喜(よろこび)、怒(いかり)などいふ如き、動詞より來れるあり。(よろこび)は(よろこぶ)といふ動詞より來り、(いかり)は(いかる)といふ動詞より來れるなり。また、白(しろ)、赤(あか)、などいふ如く、形容詞より來れるあり。また、山川(やまかは)、松原(まつむら)、春霞(はるがすみ)などいふ如く、二個の物の連合して一物をいふ如きものあり。これを連合名詞或は合併名詞などと稱す。

二、特別名詞

或は固有名詞ともいふ。一事一物に限りたる名稱にて、やがて、特に其の事其の物に限りて用ふる名にて、普く共通すべからざるものなり。例へば、日本(にほん)、東京(とうきやう)、台灣(たいわん)、吾妻橋(あづまばし)、賴朝(よりとも)、義經(よしつね)、鎌倉(かまくら)、鞍馬山(くらまやま)、正宗(まさむね)などいふ如き類にて、一人、一所、一物、一事に限れる名なり。斯の如き二種の別あるなれど、普通名詞も、殊更に一物を示すやうなれば特別名詞と成ることあり。例へば普通名詞なる鶴(つる)、龜(かめ)などいふ名の如きを、佐藤つる子などいひて、人の名となす時は特別名詞となる如し。

名詞の格

名詞の格とは、名詞が、歌の上、文章の上、口語の上にあらはるゝに、其のあらはれざまをいふなり。換言せば、名詞を口語に文章に用ふるに、其の用ひざまをいふなり。この有樣は、元來、名詞は、動詞の如く、語尾の活くことなき詞なれば(語尾の活くといふは、

例へば行か、行き、行く、行け、などいふ如くカ、キ、ク、ケ、に變じて、いろ〳〵異れる有樣を示す如きものをいふ）大抵、弖爾乎波によりて定まるなり。後に弖爾乎波の事をいふ所にて、詳しく自ら云ふべきなれど、こゝには大略を述べん。其の有樣、まづ五種あり。

第一の格、　これは、まづ例へば「雲はやし」、「風ふく」、「花散る」、などいふ時の「雲」「風」「花」などの如く、動作と形容との主となれる時の類と、また、「此の花は櫻なり」などいふ時の「櫻」の如き有樣のものにて、主格に成りたる「花」といふ名詞に同格なるべき時との二種なり。此の第一の格は、多く、其の名詞の下に、が、の、は、も、ぞ、こそなどいふ弖爾乎波を添へてあらはすなり。

第二の格、　これは、例へば、「梅の花」、「天が下」などいふ時の梅の、天がなどいふ如き類にて、下に來る所の名詞を説明する如き有樣のものなり。此の格は、の、がといふ弖爾乎波もてあらはす。通常の言語には、のを添へて、あらはすこと多し。

第三の格、　これは、に、へ、より、から、まで、にて、して、もてなどいふ弖爾乎波を以てあらはす格にて、場所、方角、由來、方便など、すべて、物の目的を示す格なり。例へば、「兵隊が台灣にゆく」「日本兵、支那より凱旋す」などいふ如き時の「台灣に」「支那より」などいふ如き有樣の時なり。

第四の格、　これは、例へば、「日本艦隊、大に支那艦隊を黄海に破る」などいふ時の「支那艦隊」をといふ如き有樣のものにて、動作の客と成る時のものにて、此の格をあらはすには、普通には、「を」といふ弖爾乎波を以てあらはす。

第五の格、　これは、物をよびかける時のものにて、多く「や」「よ」などいふ弖爾乎波を以てあらはす

斯の如く、名詞が口語文章の上にあらはるゝさまを見

るに、五樣あり。なほ此の事は、後に弖爾乎波の係りにて、自明かならむ。

一個にあらずして、かず〳〵なる物あらはすには、慥に定まりたる法則は無きが如くなれど、大低は左の二法によるなり。

一、同名詞を二度うちかへしいふ。例へば「花どな」「人びと」「國々」などいふ如くして、澤山の花、澤山の人、澤山の國をあらはすなり。

二、たち、どら、ら、ども、などいふ語を添へてあらはす。例へば「子供たちが戯れる」「女どもがやかましい」などいひて、「二人以上の子供」二人以上の女」をあらはす如し。

代名詞（かへことば）

これは、名詞の代りに用ふる詞にて、此の詞が文章口語の上にあらはるゝ有樣、此の語を口語及び文章に用ふる用ひざまは、名詞と同じなれど或は名詞の一種なりといふ人もあり。畢竟、同名詞を度々重ね用ふることの煩はしくも醜くも覺ゆらるゝより、この煩と醜とを避けんために、自ら作り出でられたる詞ならむ。例へば、

われは、汝と共に花見に行かむ。

彼も誘ひやらむ。

其處に花を折れるは、誰なるか。

此の花は紅なれど、あの花は白し。

かの花は艶なれど、其の花は美しからず。

何が最よからむ。

これが殊によし。

などいふわれ、汝、彼、そこ、たれ、この、かの、なに、これ、あの、そのなどの如き類、皆代名詞（かへことば）なり。

此の詞の中にも、われ、汝、彼れなどの如く、人の名に代れるあれど、これ、こゝ、こちなどの如く、事物場所方角などの代りに用ふるあり。また、この、その な

の如く、事物を指し示す時に用ふるものあれど、また、たれ、なに、いづくなどの如く、人、事物、場所、方角、時などの定かならぬ時に、これに代へて用ふる如きものありて、自ら四種の別あり。而して、其の四種の中にも、それ〴〵細き相違あり。今それらを、一つ二つかいわげむ。

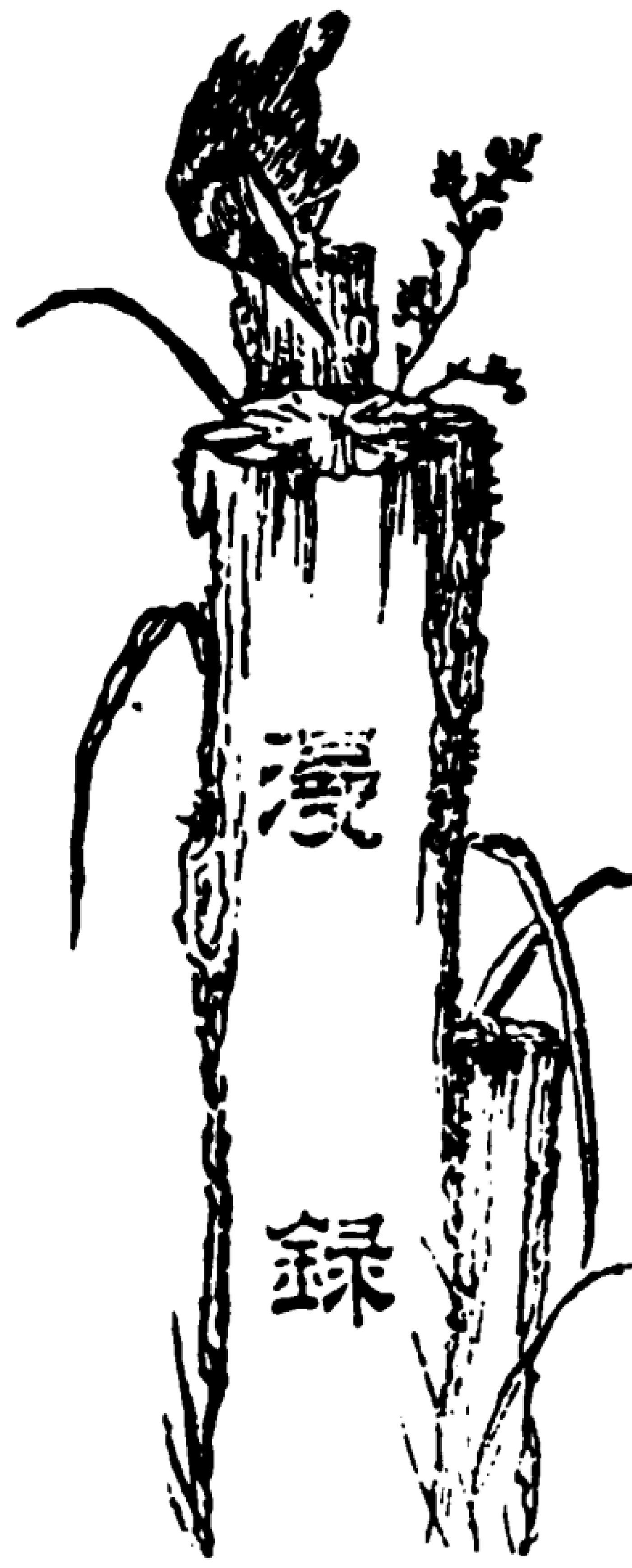
あさもよしといふこと

永石德文

こは遠江の國人、藤田道廣といへる人のものしたるを、新貝直蔭といふ人のひきいでゝ、好古叢誌といふものにのせたるをとりつ。

朝毛吉木人乏毛(萬葉集一卷廿四)。朝毛吉木上宮平(同二卷廿五)。麻裳吉木道爾入立(同四卷廿三)。朝毛吉木川邊之(同七卷十九)。朝裳吉木方性君我(同九卷九)。朝毛吉城於道乎(同十三卷廿八)。

縣居大人の冠辭考に擧たる二つの說も、鈴屋翁の麻の群立てある由のつゞけなり、と云はれたるも共にわろかめり。其故は古語に某々よしと云へる設詞の中間に助辭を置たる例なければなり。今玄もしなど云へるとは用ひざま甚異なるをや。こはまづ(萬葉集)四の卷に麻裳と作たるを正字とすべし。(集中借字なれども多く用ひたれども正字もてかきたるもいと多かり)あさもとは麻して織れる裳を云ふ。(萬葉集)九の卷廿四に直佐麻乎裳者織服而。同十六の卷八に日暴之朝手作尾(此栁も借字にて麻なり)信巾裳成者云々などあるにても知るべし。よしは意布袁余志、青丹よし、眞菅よし、玉藻よしなどのよしに同じき辭なり。さて是は麻裳を着ると云ふ意につゞけたるところ。裳着てふ事は古事記(崇神段)に故大毘古命罷二往於高志國一之時、服二腰裳一少女、立二山代之幣羅坂一而云々。同記(景行段)に服二其姨之御衣御裳一云々。また後のものながら伊勢集に北宮の御裳着たまへるに云々。類基集にも北宮の御裳着たまへるに云々。此外にも猶多かり。



なみだ草（承前）

堀田璋左右寄贈
京極忠高女作

うきみのありさまつく〴〵思ひつらぬるに、もとのねざしはくちをしからず。むまれながらいはけなきよりれやなどいふ人のあたりもしらず、人よりことにくちをしき身にもありけるかな、と思ふ事たえず。中頃あづまにくだりて、年をへて戀しく思ひ渡りし人々の御あたりを、たまさかにたつねよりて、たのもしくうれし、とやゝ身のうさもなぐさめつべきほどもなく、たのもしき御かげともにれくれたてまつりてこのかた、身のたつきなく、心細きにつけても、この人をこそ頼み渡りしに、うちすてられて來しかた行さきためしあらじ、とればゆる悲さをも見つるかな。なに事なく過ごし年月も、うらなくたのみかはして、折につけたる花紅葉の色をも香をも同じ心に見はやし給ひ、新にころなぐさむ力も多かりしに、定めなき世と云ながられくるゝほどのかなしさは、よにまたたぐひあらじと、空よりおちぬる心地すれど、ながらふる命もくち惜しく、身もうらめしく、世の中にあらんこともひとへにつらく覺ゆれど、むかし人もかゝるうき事のまれにこそ、さかりの身をもひたすら背きはてゝ、なき人の菩提をもとひ、我身の後の世をもねがひて、浮世にあととめずなりなどや、と日千たび思ひたてど、いわけなき人のよろづもしらずがほにあはれなるありさまをうちすてんもかなしく、わか君も二八にこそなり給へれ、世のありさまをもまだをさ〴〵知り給はず。われさへ見すてなどたづきなく心ぼそかりなん、この人

人をめやすく見ゆつる人もなくて、殘しとゞめんは心ぐるしく、且はなき影の見たまふらんにも歸てつみやねんと思へど身を心のまゝにもなしがたくて、あさましうあけくらさるゝは月日なりけり。

うづもれしこけの下にもいかでかり
こはきが上を思ひれくらん

さらぬだに秋の夕べはわびしきに、ましてぬしなき宿は庭もまがきもあれたる心ちして、露ふきむすぶをぎ原のすゑこす風もはだ寒く、涙催す虫の聲々とり集めたる悲しさは、たねてあるべき心地せず、暮ゆけど十五夜の月ながら千里の外もすむらん、と限なき空を眺めても思ひ出る事多くて、まづかなしくなん。

有しにもあらぬうき身の秋の空
月ぞかりころ昔なりけれ

心あらぞなきかげつれてやどれ月
ひまなくこふる袖の涙に

ともにみし十とせあまりの秋の月
こけの下にも思ひいづらん

夜もやう〳〵長くなれど、ふけ行けばひもあはれなるに、枕に近きむしの聲々喧がましきまで亂れあひて、いとゞ物心細くなん。

聲たてゝなかぬぞかりにきり〴〵す
われも涙は音なしのたき

何ぞかりのよはひにもあらず、盛りの身にて心苦しきはだしどもをうちすて給へど、いかにこの世離れ難くよろづに名殘もとまらんかし、となく〳〵こゆらんゑでの山路まで思ひやらるゝに、いかで罪輕くなり給ふぞかりれこなひもせまほしくて、ちふつのかざりとゝのへねんずを心にいれつゝ、ひま〳〵にはこの君のもてあろびてわづかにあゆみなどし給ふをいみじくうつくしく、ちゝの形見と思ふにもひとかたならぬなぐさめになんありける。

朝露のきえし形見と思ふにも

なほむつまじき山となでしこ

しでの山行て歸らぬ道柴の

露うちはらひ君やこゆらん

この君三つに成給へむかみをきさせ奉らん、ところのほどの事ども心まうけして、霜月十六日よき日なりければ、親しきかぎり上下の人々集りて賑しく祝ひごとどもして喜びあへり。この君には身づからよろづとりまかなひ、さま〴〵のあへ物、鶴龜かきたるもとゆひなどとりぐして、

萬代をかけても結ぶこむらさき

はつもとゆひに長きためしを

月日にそへてこの君のうつくしうおひまさり給ふて、今よりもの〳〵しくあてにおひきやうつきて遊び給へば、うれしき物からいとゞらうたくて心地のあしくものむつかしき折も、この子を見ればなぐさみぬ。腹立しく物うらめしき時も、うちゑまれなどして誠に身のうきふしみな忘れぬる心なんしける。五つに成給ふとし袴ぎの事いそぎたちて、む月の朔日にきせ奉る。いとゞきよらにゆゝしきまで見え給ふを、誰も〳〵涙落して見奉る。ましてかくおとなしうしたてられ玉へる美しさを見るにつけても、父の見玉はぬ事の口惜く、かかる身をもろともにあつかひたまはぬ悲しさ、よろづかきあつめてなみだもとゞめ難きを、けふはいまいましくや、とつゝみかくす。

枝しげみて高き千世の行末は

けふより見ゆる春の若松

千とせふるよはひも兼てみゆる哉

けふたちそむる鶴の毛衣

としのまさり給ふにそへて心ばへのなつかしくおひきやうつきて、はかなきあそびわざの中にも、心たきてのうるはしく、今よりけだかくゆるやかにあまりれろ

ろしきまでさかしくおひ出給ふ。父をどもとよりみぬ物にならひてこひしとも何とも思ひたまはず、たゞ明暮かたはらさらずなれまつはしてむつれ遊び玉ふ。物心もしり、をよすけ玉ふまゝに、れやをど大事に思ふ物ぞと心ね玉ひて、幼心になにくれとはかなき事につけても、かう〳〵のれもむき今よりこまやかに、いふどかりなき心ざまをあはれに嬉しき物からたのもしくて、たかき山とまはりつゝ春の日の暮しがたきにも、この子に戯れなぐさみて年暮ぬる心地し、秋の夜のながきにも、おましのあたりちかくふして、かいしやくするにひかされつゝはかなくあけぬる心地して、この君のかしづきによろづ心のいとまなく、過行ほどに此君六つに成給ふ。ろの比刑部の君は此度ねどにておづまに渡らせ給ふおはせ事にて、佐々九郎兵衛のせうより、む月の末にせうろくありけり。なに心なく開き見れど刑部の君に未だ若君おはしまさず。なべて人のする事にてまじなひによき事ときこしめせど、頼母の助を御子になさせ給ふべし、おとりみいでゝ若君出き給はゞ、この君をどくぼうの御身ちかきめし使人となし給ひて、姫君たちれはすれど御むことなさせ給はんとなり。うちみる心地いはんかたなく嬉し。かゝる御さだめときゝて、所にある人々高きも下れるもさゞめき渡りて、我も〳〵と道もさりあへず、門外も所せきまで集り悦給ふ。身づからの心はましてとし月かけても思ひよらず。かゝる幸は願ひても有まじき事なれど、かぎりなく嬉しきものから、さすがに朝夕見てもわかず片時見ぬも戀しきに、はる〴〵と別れなど戀しさをいかにせん、かぎり有我命もいかでながらふべきと思へど、今より胸つとふたがりて、ともすれど涙の出くるに我ながらあまりなる心なりけり。昔我父忠高の君くぼうの御ればねいみじく、出雲隱岐兩國を賜はり給ひて、肩を並ぶる人もなかりしに、四ろぢにあまり給

ふまで代つぎの御子持ち給はで、いかなる事にやどり子さへせさせ給はず。俄に墓なくかくれ給へば、御かげをたのみぬる數多の人々、闇に迷へる心地せしに、天下の君の御惠ありがたく御なさけ深くおはしまして、御憐のあまりにこの刑部の君をめし出して、この所をくだされ家を繼しめ給ふ。ゆゑしらぬ人々はつき奉りて、御名字つゝがなし。かやうの事どもにうんじ給ふにや、この君の事をかく定め給ひて、くぼうの御身ちかく世のためしと成給ふ。さりぬべき人々の誰も〳〵うけひき給ひて、天下の下にて事定まり、ことさら北の御方の此君ならではとせちに床しき事におぼしの給ふなれば、行末迄も賴もしくかく思ひかけず空より出きたるやうにて、のがれんかたなき幸もさきの世の契りふかく物し給ひて、佛神の御はうべんにこそと思へば、我身はともかくても、この君の御ためさへよからましかば、と思ひねんじて、愈よ此君をなでかしづけてあかし暮すに、刑部の君はその年つねよりははやく御暇給はり給ひて上らせ給ふほどに、彌生の十四日には所につかせ給ふ。

（未完）

淺瀨のしるべ

故人　藤井高尙

とりすべていふことゞも

世の人の言種に、おへる子にをしへられて淺瀨をわたる、といふは、あまりにふかくものおもひすごしては、おのがさかしら心まよひていかにしてよからん、とおもひさだめかぬるを、かたへの人はなほく正しくまこゝろのまゝに思ひとりて、あるべきまゝに其事はかくするぞよき、とをしふるがまことによろしきをたとへていへるものにて、すぐれてよき人こそさるまよひもなからめ、なみ〳〵のきはゝみなさやうにぞありける。高尙おろかにてことしあるをりなど、いみじうて

ゝろまどひて、つりする蜑のうけなれやと、こゝろひとつにさだめかねたる事もありしは、かのさかしき人の淺瀬を見しらでまどへりけるたぐひになん、さて月日へてのちうきたるこゝろのしづまりては、こともなく思ひさだめらるゝは、おはれたる子のまどはぬに同じ。されど世には正しくまことの道をことなきをりに、かねてよろづにかうがへおくべしと、やう〱此ごろ心つきそめて、世の中のことをとかくおもひめぐらすに、いさゝかは思ひうることのあるを、おなじくはものにかき出て、人のためにもなしてんと、おふけなくおもひたちぬ。されどかしこき人のいさめをすらきゝいれぬ人の、世にはおほかるを、おのれがたゞにいひたらんには、いかでかはとて世の人のつねの言ぐさにいふ事どもをとりいでゝ、それによりていふになん。さとびとのことぐさをとりいでゝ、そのこゝろをいひひろむとならど、これもさとび言して人のたやすくさとりやすきやうにこゝろものすべきに。みやびぶみにかけるはいかにといふに、このことぐさむげにいやしきいひざまなるからに、すこしもの〱しき人などはをさ〱いはぬことにしあれど、さとびごとにて其こゝろをいひたらんには、いよ〱いやしみてふづくゑのあたりなどには、おくべきものともせざらんがうれたく、さては此言種のよき人のあたりに見えまがふことなくて、かくとりあつめたるはいもとげかたけれどなり。

あさはかにきこゆる言種も、神代のつたへのまことの道のこゝろどへにかよへるがおほきは、神のみこゝろよりいでゝ、世の人のくちにいはしめたまふもあれどなるべし。まかれもおもひたれど、これはそれとひとつでとにとりいでゝはいはず。さるはかくをこがましきさしいでにものしりめきたる事をさへとりそへたらんには、つまはじきして見さす人のかならずあるべしとお

もひてなり。

此書は世の中のありさまのさしわたりたることのみいひて、ものをきふることを心つとめていはじとしつれど、とりはづしてひとつふたつはいへりき。

ことぐさのいひざま國々にて、いさゝかづゝはかはれるやうにきこゆ。此ふみにしるしたるは、このきびの國わたりにてのいひざまなり。

とりいでたることぐさよ。これにかぎれるにはあらず。世には猶いとおほくさま〳〵あれど、たゞおもひ出るまゝにかきもてゆきけるに、やゝかずおほくなりにたれど、今は見む人のうるさくや思ふべき、とこゝろづける所にて筆をとゞめたるになん。をかしき言種も人のをしへとならざるはとり出ず。さてふかくかうがへてものせるにあらねど、よきをしへとなるべきを、もらしてなとふことなきをいだせるものもあるべし。

人のわろきは我わろきなり

われに人のあしくするは、大かたおのれもその人のためよからぬわざせしゆゑなり。我身のうへのあしきことはしりがたきものなるに、まいていさゝかなることゞもはさらにおもひもよらず。人のあしくするがこゝろやましきまゝに、ことさらにこなたよりもあしきわざし、にくげなることいひはげましなどすれど、かなたにもいよ〳〵はらたちてまけじだましひに、せぬわざをもするぞかし。さるをりに此言種をおもひいでゝ、人のはらたつはわがあしきことありしにこそ、とおもひめぐらして、思ひねずぞその人のしたしき人などにとひきゝて、いさゝかにてもおのがわろきすぢをきゝいでなば、すみやかになほすべし。しかすれど人もまたはぢおもひて、よくすべくなん。とられはかみなどいふものこそなたよりよくしても、なにともおもはざ

らめ。人はいかにはらあしくてもさやうのものにはあらず。さてまた人のなかをさけんとてなか言するものゝありて、れぼねなきに人のうらむるたぐひもあれど、さるをりもこなたよりははらたちうらみずて、その人のむつまじき人などによりてればえなきよしをあきらめいへど、かなたにも思ひあはすることのありて、ころ言はあらはるゝものぞ。其あきらめいふことすなはちにいふはわろし。はらたつさかりにはのべやることゝもきゝいれぬものなれど、日數へてのちにいふべきなり。

なさけは人のためならず

ものゝあはれをしりて、人のためよろづになさけふかく、はかなきことにもまめなることにも思ひやりれはかるぞよき人にはありける。みな人かんじれもひて、ろの人のためにはなき手をも出さんのこゝろになりて、ことあらんをりはたすけもすべし。れはくの人のあしかれとれもはぬひとには、天地の神もこゝろよせたまふことわりあれど、よきことの出くべくなん。すべてなさけのれくれては、おうの君ちゝ母などにつかふるにも、いかめしきかたさまをぞ、たてゝまことにしみてふかきところなく、女子をうつくしみつかふものどもをめぐむにも、ゝのまめやかならざるべし。

人のこといはんよりひぢあかれとせ

友のまとゐの世がたりに、われかしこげに人のうへをなんつけいみじうあしくいふ人あり。さるさがなきしりう言もきゝつたへたらん人はらたゝざらんやは。おおかあしくいふものゝみづからのうへにも、あしき事あれど心づかぬをきく人のおたにをかしくれもひをらんは、いとはづかしきことならずや。　（未完）

おきの玉藻（七）

永石徳文

いつはらぬこと

唐に楯と矛とを市に出て賣ものあり。楯を賣時はみづからほめて、此楯は何やう成矛を以てやぶる共、やぶる丶事有べからずといひ、又はこを賣時はみづからほめて、此矛を以てつきやぶらむ、何たるかたきたて成ともやぶれざる事なしといふ。ある人聞て汝が矛を以てその楯をやぶらむ如何といひしに、口をとぢてこたへず。是を自語相違といふなり。高直にうらんとするいつはり有ゆゑ、覺えずして詞のちがひあり。總じていつはりある事をいふ人は何程上手をいひても、詞の相違ありて聞とらる丶物なれば、いつはる事をば必ずすまじきものなり。　(子孫寶草)

ふるきたとへなれども、下ざまにはありがちのことなるべし

・・・・・・・・・

孝

人は愚痴なる親は無理おほき故、孝行成がたしと思へり。然れども是も道理にあたらず。瞽瞍は愚痴なる親にて舜をにくみ、度々ころさんとせしかども、少しもうらみずしてよく孝行をつくせし故、大孝行の名をとりて、天子と成給ふ。又曾子は親に大孝の人なり。孟子は是をさへ中の孝行なり、人の子たる者は曾子ほどに孝行するが職分なり、とて大きにはほめ給はぬ也。曾子程の孝行の人さへ中分ならば、今の世に中分にあたる孝行あるべからず。扨又親のちひさき杖にてうたばうたるべし、大なる杖にてうたんといかるときは、にぐるを禮なり、と孔子はをしへ給ふ也。忠臣は孝子の門にもとむ、といへり。親に孝ある人は主君にもかならす忠あるもの也。」

親よりうけたる身をそこなひやぶり、又は惡事にて命をすつるたぐひを大不孝といふ也。身を立仁道をつとめ、我名をあげて、親の名をあらはすを第一の孝行な

りとす。わが親をそうやまはずして、他人の親をうやまふをぞ悖禮といふ也。子を愛する心をもつて親に仕へぞ孝行の名をとるべし。又人目にはさのみ孝行見えずして心の内に孝行のこゝろざしあつき者あり。人はしらずといへども、天道是を知り給ひて、あはれみをたれ給ふ也。親をよく孝養する者は、他人へもおのづから禮うつるもの也。親に孝盡さんと思はゞ親のいふことをそむかず、外へ出る時も親にうかゞひ歸りても又さかすべし。老年の親ある人は遠くゆきてあそぶべからず。親死して後三年も過ざるに、親の志おきたる事をもときあらためて、我思ふやうにするは、大不孝なり。一切の罪科の内に不孝より大いなるはなし。三千界の人をころすよりも父母をころすがおもきと見えたり。しかるに親より金銀家督をゆづられざる者は、大方の人親の恩はなしと思へり。又は幼少より奉公して親をもやしなひし故、かへつて親へ恩有といふやから世におほし。是は放逸なる云分なり。父母の恩は大海よりも深く須彌山よりも高しとなり。一夜の育み一日のなさけ、其志のあつき事、一生の内にも謝しつくすべきや。

(同上)

親に孝たるべし、とは三才の童もよくしれることとなり。されどもまことにその孝を行ふもの大かた少し。しりたりとて、行はずは何のかひかあらんや。既に行へるものは益々その志を堅くし、あやまてりと知らは今より直に改めて行ふべし。わが友某かつて親いかりたることありて、汝は我子にあらず我を親とな思ひそ、今よりは何處になりとも思ふところに去ぬべしと、叱したるに益々孝心を堅くして、わが父はよし子とおはさずとも父は父なり、いかで親とおもはさらんとて孝養をつくしゝに、遂にかれやも和らぎ、人もほめぬはなかりけり。世には親のいさめもきかず、わがまゝなるふるまひのみ多くして、我

身ひとりにて育たりとおもへるもなしとはいふべからず。ふかくおもふべきことなり。もし不孝なる行あらんにはさきあげたる支那人にもおとれるものといふべしはづべきかぎりならずや。

◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎

黄門光國公御教諭

一　樂は苦の種苦は樂の種と知るべし。

一　主と親とは無理なるものと知れ。下人は足らぬものと知るべし。

一　子ほど親をおもひ、子なきもの身に比べて近き手本にせよ。

一　掟に恐れよ、火におぢよ、分別なき者におぢよ。

一　恩をわするゝ事なかれ。

一　色と酒とは敵と知るべし。

一　朝寢すべからず、咄の長坐すべからず。

一　小なる事には分別せよ、大なる事に驚くべからず。

一　九分は足らず十分はこぼるゝと知るべし。

一　分別は堪忍にあると知るべし。

◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎

まねをまねするに及ぶまじ

此國は災異を見ておそるゝ事すくなし。されど祥瑞をもて、へつらひのたすけとする事も、またすくなし、元日に日食あれども、つかさに命じて、まれきのよしあしをいはしむる事、あながち言をもとむるのまことゝあるにもあらねど、後の世にては、ひとつの儀式のやうになれり、告朔のひつじにおなじくもろこしにては、すてさるぞよき、此國にてそのまねし、まねをまねするにはおよぶまじ。（たはれぐさ）

こは今はむかしのことになりぬ。今の世は世界にありとある國々のこと入りまじれり。まねをまねすることありやいかに。

嵯峨野の月

野村半醉居士

浮世のはかなきを察し、宮中を出で丶、黒髪をすみ染の衣となし、嵯峨野の奥に庵を結びたる、妓王妓女の來歴を探れば、近江國、野州郡、江邊の庄（今の滋賀縣野州郡祇王村字北）司江部九郎時定の息女なれど、月花の宴に白拍子を召されける身なりしも、時變り風うつり、父時定平氏の怒に觸れて、遠流の身となりしかば、母刀自に伴はれて、都に來り祇園の林に於て、藝を鬻ぎて母子三人養なひつ丶、當頃平相國入道清盛公妓王の容貌衆にすぐれ、藝の達者なること京中の白拍子の冠たるを聞き、一度召して宴に侍らせしが、入道の寵愛斜ならず、妹妓女と共に、世に羨やまれ、母刀自も美しき家を與へられ、食を送りて榮華身に餘りたり、然れむころ、相國入道の寵遇の余り、心に望む事あらむ協へ得させんとぞ、言ひ給ひけるとき、妾故郷なる江邊の庄は、年々旱魃にて穀物の豐熟よろしからず、百姓の苦しむ事一方ならぬを、常に父の九郎が患へ侍りき。あはれ殿下の御威勢を以て、民の苦難を救はせ給ひ、妾が悦びは申さん辭なしとありけるに、相國入道大に感じ給ひて、家臣をして地の理を相せしめけるに、伊勢近江の國境鈴鹿山より新に川を鑿ちて水を引かんには、旱魃の患を除くべしと申けるに、相國入道の命とありて、程なく一川を鑿ちて、之を民に利せしむ、今之を妓王井川と稱す。

其后都の白拍子佛御前ありて、入道又之を寵愛し給ひけるより、技王は、

萠えいづるも枯るゝも同じ野邊の草
何れか秋に逢はではつべき

と一首の歌を障子に殘して、西八條殿を逝れて、母刀自と共に嵯峨の往生院に入り、母子三人黒髪を絶ちて、錦繡の衣を棄て、墨染の衣となし、佛もゝとは凡夫な

らずや、我等も終らむ佛なり、同じ佛性を具ふる身を、今迄隔てたりとは悲しかりけりと、念佛の修行おこたりなかりけり。佛御前が障子に書きわりし和歌を見て、急ぎ樣をかへ、同じ庵を訪ね來りて、共に念佛往生の素懷を遂げたりと、其時妓王二十一、妓女十九、佛御前十七、母刀自四十五、なりしとぞ。

妓王井川の流れは、淵となるとても、貞名は千代朽ちざるを、ましてや今に至る迄、百姓皆其恩德を蒙り、年々豐熟しけるを、妓王等往生院に寂を示しけるより、村人等追慕の涙に袖をしぼりて、川のほとりに一宇の庵を建立して之を祭り、妓王寺と稱へて香華の絶ゆる事なし、今も猶尼寺の檐傾かず、念佛の聲幾千代迄も朽ちざる、江邊の庄は町村制によりて祇王村と公稱してより、妓王の功、層一層いちしるく、誠に千古の美談と云ふべし。然るに嵯峨の往生院妓王寺は、物變星遷り、維持の方法立ち難く、庵は次第に破壞するにまかせたれば、さしもの遺跡も茅茨の内にうづもれたるを、往々探勝の人々昔を感じて、跡訪ふよすがなきを歎じて、再興を說きすゝめしより、嵯峨の有志者、及滋賀縣野州郡祇王村(元の江邊の庄)の有志者と共に、再建の緒に就きしに、折節北垣北海道廳長官之を聞き、氏が嵐峽に數寄を盡して、建立したる、茶室を寄附せられたり。よき人の果、是より香華の絶ゆる事やなからん、かくあらまほしくこそ。

識者申す。是は拙劣が去る年洛西漫遊中、嵯峨の大覺寺に入り、妓王妓女佛御前及母刀自　淸盛公の肖像を拜見し、寺僧に依て、緣起を問ひ　緣起錄、繪卷物、繪は狩野山樂、詞書は妙法院門跡の直筆なる中より大要を聞き、紙片に記しおりしを、當時忘棄してありしも、此頃氣の附きたるまゝ書面を汚して、妓王等の遺跡を明にす。

編者いふ、妓王妓女のことは、臺井ふく子とじ

がものせられたるきを、さきに史談欄にかゝげつるが、いま半酔居士といへる人、大坂れもてより、わざ〳〵れこせたるが、故跡などくはしけれど、なほこゝにのせつ。

寄山祝　此君生

萬代も千代も動かぬ足引の山ころげにわが日の本の姿なりけれ。掛まくはかしこけれど、天津日の影高千穂の久士布流が嶽にかゞやき、神武の御門畝傍の山に無窮の基を開き給ひてしより、難波の山には仁徳の聖帝民富めりとれはせでち、天の香具山には舒明のすめらみこと、民のかまどのにぎはひをみろなはし、或は醍醐の君は九重の雲深き山邊に寒夜御衣を除き給ふなど、代々の君つぎ〳〵の主上大御心を政に注ぎ、大御身を民の上につくし、大御惠の雨は笠取山のこのもとにも及び、大御なさけの露は小倉山の下もみちをもうるはし給ひて、こゝに三千年。國榮え民富みて日の本の名は早く天の下にいと高うなむ。まことに。神路山の天津日は緑、色こき松が枝にかゝりて、神代ながらの大御代を照らし、高倉山の木下露は瑞穂國の田畑をうるはして、みづほの名空しからずなむ。はた彼の吉野の山の朝日に匂ふ山櫻はわが國人のあかき心にきはひ、不士の高根の白雪はわが御公民の清き心にたとへむもいとことふりたりや。

殊に明治のすめらみこと大内山の千代八千代常磐のみどり濃かなる大御位にまし〳〵てよりは、道といふ道は鹿のなく山里までもひらけゆき、才といふ才は位山みのほど〳〵にのぼりろめて、げにやゆたのたゆたにたのしき大御代なりけり。一度外國のきたなき夷をこらし三千年來の大稜威を不士の高根のいやたかく〳〵にかゞやかし給ひて、モリソン山の麓までも尚大御惠

の露至らぬくまなきぞいとかしこき。あはれヒマラヤ山の項に日の大御旗を高くなびかしアルプス山のたかねにすめらみことの萬歲を唱へまつらむはそも誰がつとめぞや。吉野の櫻か。ふじの白雪か。わらじ。高千穗のくじふる嶽の其のいにしへよりいやつぎ〳〵に大御惠にうるほひ、山行かむ草むす屍と歌うやまとをのこのつとめならでやは。

雛あそび

草の屋主人

誰が、何時よりか、はじめたりけむ。これも、優にやさしく、みやびやかなる大和島根の手振りや。今も、春の彌生の三日を、女子の節句日とて、都も鄙もおしなべて、玉の殿居、錦のとぞり、ねぞろの奥、藻屑が蔭、所々のとり〳〵に、雛さまとて、小やかなる人形の美しきを、床に飾り据ゑ、女子の心とも影ともすべき鏡の小さきより、小さき箪笥、小さき長持、小さき鏡臺、小さき針箱、小さき折敷、小さきたかつきなど、すべて、嫁入りの道具、日用の調度より、茶の湯の器さへに、雛に相應しき小さきをとゝのへ飾り、折りからとて、桃の花の、やさしげにほゝゑめるをさしかざり、白酒、菱餅、草餅、炒豆、熬米、蛤、榮螺子、硯蓋、菓子など、とり〴〵に、くさ〴〵の物を供へて、まつり遊ぶことゝす。所々により、雛も調度も供物も、品々を異にせるも、まつりあそぶ心は一なり。やがて、世の中の女子の道に反むくことなきやう、忘れぬやう、いはひまつりて、わが身の上を頼む心なり。

雛あそびといふ詞は、いと遠き古へより、ものにも、かづ〳〵見ゑたり。殊に、上れるさはは、崇神天皇の御時に、和珥坂の少女のうたへる謠の中に「ヒメアソビスモ」といふ詞見ゑたるも、これならむかといふ。それは、あまりにればろげにて、ゑかとはわかねど、う

つぼ物語樓上の卷に

あけぬれど、くるゝまで、いぬみや、ひゝなあそびしたまふ。

また、同じく藏びらきの卷に

車どもを、雛にねのひせさせ給ふとて、

ゐてまゐりつるとて、たてまつりたまへど、宮だちも、悅びて弄び給ふ。

また、

きん取りよせて、たてまつりたまへど、ひゝなにきかせん、いづらとのたまへど、笑ひ給ひて、こゝに侍りとて、れ前にさしすゑ給へり。

など「ひゝな」といふ事、こゝかしこ見ゆ。其の他源氏物語の中には、末摘花の卷に、源氏が紫の上と、



例のもろともにひゝなあそびし給ふ。といふことあり。其の他若菜の卷にも、紅葉賀の卷にも、薄雲の卷にも、乙女の卷にも、ひひなあそびの事見ゆ。其の外には、枕草紙などにも見ゆ。此の頃は、專ら婦女子の遊びごとゝして盛りなりしならむ。もとより今の雛まつりの如きものにはあらず。唯常に雛を弄びて遊びたるなり。

今の樣に、彌生の三日にのみ、いはひまつりて、遊ぶが如きものとは、其の樣子も異りしなり。」

今樣の三月の三日にのみ雛をまつりて遊ぶやうなれるはその上の雛遊びのうつり變れるものならむといふ。即ちその上に行はれたる祓の手振りなど混じて、今樣の如き雛祭の手振りとは成り來れるならむといふ。その上には、朝夕過ち犯しも汚れもせる罪穢を祓ひ淸むるといふ事ありたり。即ち、陰陽師といふ方より、紙もて人の形つくれる物を送り來れど、この紙の人形にて、我身體をなでゝ、さすれど、我身體の罪穢は、これに移りつきたりとて、さて、とかうして、また、これを、河邊より水にれしながしやるなり。さすれど、其日までの罪も穢も拂ひ去り淸めやりたりとするなり。此の祓につかひたる人形を、後には、河邊へ流しやることを、いつしか誰か爲ずなりて、これを内にいはひまつるやうなり、遂に女子の常の慰みなる雛遊びといふものと相混じたるならむといふ。而して、その祓の人形を内にかざりかしづくや。はじめは、女子の上のものゝみともかぎらざりしならむを、斯く人形をいはひ遊ぶといふこと、男子には似つかぬわざなれど、いつしか、女子のためのその祭りと成り來れるならむといふ。そはともあれかくもあれ、桃の花のもゝよも、かくてありたき遊びにこそ。女子の一生の道も見ゆる遊びなれど、

花賣

さぎりのや

花エイ、〳〵。芽出たき花よ。一枝めし給へやなど皺がれたる聲ふりわけ荷へる花を賣りゆく翁あり。額に老の年波をうたせたるは六十路の坂を越ゑししるしなんめり。身にはこゝかしこ綴り合せたる衣を纏ひ、頭にはしかとあらぬ髪を結び、足には破れし草鞋をうがてり。その姿むげに賤しげなり。あはれ世には樣々の生業もあるものかな。やよ翁吾に一枝とらせ。花はなさけなげなるを。値も安くてうる物ぞ。いざめし給へこの枝をかし。花の香もいとよし。小瓶にさし給はらむ鶯も來なきやせむ。時はやゝ遲れたれど水仙も亦一しほなり。など鼻うごめかしてすゝめぬ。その云ひ樣世なれたりと覺ゆ。この枝にてよし。あなゆかしき梅のかをりや。立枝ながらにめでんにはいかでかりをかしかるらむ。手折し汝こそ憎けれ。惡樣に移りゆく世に習はぬこの梅の心をあはれと思はずや。花心あらでいぎたなき汝がしわざを笑ふらむ。汝はその仕業を恥しと思はざるか。花に身を隱して人をな欺きそと云へど、翁打はゝゑみて、こは怪しきことをの給ふ人かな。われこの業して世を渡ることいと久し。われ日毎に市に出でその折々の花を賣るに買ふ人は花のよしあしをこそ難ずれ。いまだ吾をかく云ひくだしたる人はなかりき。誠に心なき花木を打ち手折りて人にすゝむる吾が心は鬼なり。されど是も吾が世わたるたづき。詮方もなしや。それ君子は一言もちてその人のよしあしを知るとかや。君輕々しく物なの給ひそ。げに吾はこの花の如くならで身と心とは裏うへなり。さはあれど是吾のみにはあらず。見給へ今世上の人の行を。上は大臣公卿より下吾等がどちに至るまでうはべのみ飾りて心を鬼とせるにあらずや。この花に向ひて耻ぢざる物幾人かある。惡樣に移りゆく世なりと君もの給ひき

さては吾をのみさまでありし様に難じ給ふ理もなかるべし。あはれ上に聖の君ましますにも似やらず下にこの行ありとはうもうたてき業になむ。かく云ひもて行けむ皆涙の種。嗚呼いはで止みなむ。老の愚痴と笑ひ給ふらむが君も輕々しく物なの給ひそ。其の花にな笑はれ給ひそ、とてやをら花籠肩にとりあげ花ェイ、〳〵の聲を後に殘してかなたの路地に影を隱したり。さても彼が詞のいま〳〵しさよ。翁の口さがなきより云ひいでしにや。はた移りゆく世を歎きての餘りにや。そも彼は如何なる人ならむ。大君の御惠に漏れし人か世に入れられざるものか。前の世の宿世とはいへ。花もて世を渡るがの翁あはれ。

野寺の墓

石榑千亦

（は）

徳川の流にごりはて丶遂にすまず、神代よりたゞ一筋の大君の御惠の露は、青人草の末の末にも及ばずといふことなく、千代田城頭の松風は更に八千代の聲を調べ、袖が浦わの波音は太平の響と打かはり、都の名も東京と改まりぬる世にも、江戸の花といひけむ火の災は、木枯の風ふきすさぶ頃より絶ゆる夜もあらざりしが、近き頃はひ火消のわざも器具もいよ丶進みて、大きなるは絶えてあらずなりしかど、世の人皆憂の眉をひらきける中に、いかなるもの丶禍になりなむもはかり難きは人の世の常、その災なくなりしのみならず、火には堅き煉瓦もてたゝみたつるが多くなりてより、いちじろく身に及びつるは勝藏の上なり。修繕のわざは大きなるがなく、たまには官廳の仕事、某殿の別莊とやうに、全くなきにもあらざれど、役所のは大かた利にさとき請負師の手に任され、傭はれむとならむ傭はれぬべきも、頭梁々々とすかさずいひはやしくる丶

はどには得物はなく、わづかに斧持ち鉋とり得るものとひとしなみに、鋸屑の如くもてあつかはれ、お邸方にても家扶とか家令とやらむの心のまに〳〵、お出入とか親の代よりの頭梁とかいふ古代なることはいはず。あまたの大工に札入れしめ極めてやすきにせさせ、中にはわが袖の下に入るゝもの、多少によりていひつくるなど、腕も力も見てはくれず。一たび風あれ地震ゆりたらむには、忽ち破れ崩れぬべきには露斗も心をとめぬとが今様の習はしにて、昨日まで盛えし勝藏が身の上には殊更にひゞきわたりぬ。

（へ）

一人殖えしのみか雪子は昔の如く働かるゝ身にもあらず、泣けど添乳にとて時をうつし、笑へどかはゆしとて又時をすごし、おひつ抱きつ、大方其身一つはこの子の上にかゝりぬ。手の少なくなりぬる上に、父母は老いて又昨日の如くもあらず、勝藏は内にあれどとてはか〳〵しく手助けもせず。何につけかにつけつゝ、費のみ多くして入ることは少なくなりけれど、七兵衛の胸の火はやくが如く、妻にうつり娘を叱り孫にあたる。一昨年昨年の如く他所にのみ出でゝくらしゝ折はなほ忍ばれけれど、さらぬだに思ふ仕事もなく、心も心ならず内にのみこもりゐる勝藏は、中々に父の心にもまさりて苦しく憤ろしく、我等ころとまれ角まれ、子にまでつれなくしたまふことあまりといへど、情なき限なり。あはれ思へどこの家に來てより片時だに安き間とてはなく、たゞ妻の情にほだされて忍びに忍びしとはいへ、われありてはいつまでこの家の治まることあるべき、初め來む時親々の心もさぐりよく調べに調べてありなましかど、今この悔はあらざらまし。これといふもたゞ表面のことにのみ目のくれつるよりおこりしことにて、いはゞわが罪は今はた誰をか恨み誰をか咎めむ、其折はわが腕一つにていかさまにもなり

なむと思ひしがあやまり。さても揃ひも揃ひて無慈悲なるに引かへてかれが情、あゝ思へど腸も断るゝ思ひ、されどかくていつまであるべくもあらず、まゝよこれまでの契とあきらめ、今の中にともかくもするが身の幸。何よりも金一が不憫なり、わがをらずならど自づと内も治まりてかの子の仕合、いかに鬼々しき心なれどとて少しはなほらぬこともあらじ。さるにてもかくと知らばさぞ彼が歎くならむをあはれの事やと思煩ひつゝ、雁が音うら悲しう、月の光は身をきるが如く、空にはうかべる雲霧もなきを、むすぼゝれてとけぬ思ひにふむ足の、今霄を限と思へど妻の面かげ子の姿前に後に立ふさがり、顧み勝に出でゆく知らず、雪子はいかなる夢をか結ぶらむ、さても金一は。

露よりも先に起出し雪子は夫の居ぬを見ていたく打驚きいろぎ父母につげぬ。されど悲しめるさまもなく中々によろこべるさまなるに、悲しさやらむかたなく、こしかた行末を思へど消えも入りたき心地す。あゝ思へど苦しき中にも子の笑貌を見れど何となく慰まれ、悲しきこともまづ夫にかたらひてともにすれどさすがに忘れてありしを、あゝ今はなし。天は白雲の幾重の上にわけのぼり、地は岩が根の幾重の下にさぐり入るとも、身を任すべき人又あるべくもあらず、幾千萬と数いかにさはなりとて、われはたゞ一人をれきては又見ゆべき人もなきを、わが心知らぬことはよもあらじな。われかどかりに思ふを見すて給ひていかにせよとの御事か、さはいへ理なきにはあらず、入らせ給ひてより悲しみをころともにしつれ、樂しみといふことは露斗もなかりし故、とはいへ親をも兄弟をもふりすつるはたゞ一人の夫のためと聞きしものを、塵斗もかくと知らせ給はず、文の一つだにのこしれき給はぬこと、日頃いとしかなしといひましゝも、この子が不憫なれどといひまさぬ夜もれはさゞりしを、ろもうろな

りしか僞なりしか、あまりといへどつれなの御心や、れもひ定め給ひてはとてもかくてもとゞまるべくもまさず、又とめまつることも得ぬことは志らぬとればしてか、なぞか理ならとゞめまゐらすべき。この子はわか身一人の子にはあらず、まして男の兒は男につくとかいふを、いかにせよとの掟もなさで出ましゝは何事ぞ。さても父上といひ母樣まで先貧乏神が出でゆけど此上なきことゝ、厄にても拂ひしやうにいひ給ひて、尋ねて見よともいひいで給はぬ口をしさ、あゝわが身斗幸なきものゝ世にあるべきぞとくりかへしつゝ思へども、なほつきぬはあつき涕なり。

落花

柴田千稻

第二　宿請ひ申す

彼の若武者は二町計り走りて、息漸く迫り來りたれど、歩を留めて後を顧れど、既に追ひ來る敵の氣配もなく、走り來る人の足音も聞ゑず、只茫々たる原野は月に靡きて、數知れぬ白露は千艸を飾りて珠と散りぬ。太刀を鞘に收めて空を仰ぎつゝカラ〳〵と打笑ひ、アゝ思ひもよらぬ奴輩に驚されて、あたら時を過したり、武士の身に逼るとは耻しき事にはあれど、高が野武士等の爲に重き此身を殺しもせど、今迄生き延び來りし甲斐もなけん、さはさりながらと云ひ差して、悵然として四邊を見廻し、是より何處を目的として落ち行かん、左せんか右せんか、ゝれさへ見渡す限り凡て草のみ風に靡きて、里は何處と知る由もなしあゝ思へど哀なる身の上となりける哉、先きに故鄕を立出でし時は、我を扶け我を導きし郞等もありしものを、一人死二人死今は我をいたはり我を慰むる者もなく……エゝ女々しや今更何を嘆くべきぞ、男子一度劒を杖きて軍に從ふ、かゝる覺悟は兼ての事なり、足の限り歩

み行き、若し止む事を得ざれば艸枕に一夜を明すも興あらん、いざさらば今宵を千草の内に明して、かくて後落つく先を定めんものと、漸く思ひ定めて歩み出たり。何を知邊ともなく草葉の露にそばちつゝ歩み行けり、見上ぐれば晃々たる月は中天にかゝりて、誰を待とてかこゝら鳴くなる虫の聲々、誰が玉章をかけて何處に行くらん、月を掠めて急ぐ雁の一列二列、思ひ來れば何れか斷腸の涙ならざらん。若武者は屢々足を留めて、俯仰して去る事能はざるものゝ如し。

歩む事十數町にして前の方を望見れば、遙に燈火の影の隱見するを認めぬ。さては嬉しや里近くなりたりと見ゆ。いざ一夜の宿を驚かして見ん、たとひ落武者なりとて、よも情なく拒みもすまじと之に力を得て疲れたる足を引きつゝ來見れば、小高き丘の元に一軒のさゝやかなる庵あり。其周圍には木立枝を交へて鬱々として生茂り、月の光星の影を隔て、闇は四邊を黑漆に染めて、悽愴たる夜氣陰々として人を襲ひ、僅に窓を漏るゝ燈火の光のみは、薄く細く一道の線を畫きて遙に森の青葉の蔭に消えぬ。若武者はやをら其戸口に寄りて戸をほと〳〵と叩き、これは旅の者に候が、道を失ひて思はず夜を更し、あまつさへ足を痛めて早や一歩も運び兼ね候へば、如何なる庭の片偶にても厭ひ申さぬにより、一夜の宿を御貸し候へかし、うちつけの儀に候へど、曲げて御許し下され候へと、物柔かに申入るれど、寂寞として人氣もなきかと思はるゝ家の内に、やがて微に衣の擦合ふ音して、思もかけぬ優しき女の聲、『何れに赴かせ給ふ御方かは知らねど、それは嘸かし苦しみ給はん、かく疲れさせ給ふを情なく御斷り申すも御いとほしうは候へど、あやにく主人の留守に候て、女一人の我身には如何にとも計らひ兼ね候へど、兎に角に御宿りはかなひ申すまじ。されど、これより人里ある所迄は程近く候へば、急がせ給はゞやが

て程なく着かせ給はん、返す〴〵も心苦しうは候ものゝ、かゝる様に候へど如何にせん術も候はず、又宿らせ給ふとも、恥しながら聞召す物も候はねど』『御仰御無理とは思ひ候はねど、疲れたる身に加へて、かゝる野原に道の案内も知り申さゞれど、草に眠るより詮方なき今宵、如何なる床の片隅にても如何なる床の下にても、ゆめ厭ひ申さねど、曲げて一夜の露を凌がせ給へ、元より食も望み申さず飲物も望み候はず、あはれ海山高き深き御恩に、只一夜の宿りを許させ給へと、再びかく申し入るれど、内には暫し沈吟するものゝ如くなりしが、やがていと余儀なげに云ひ出すやう、かくのたまふを強て拒み申すもいと本意なし、さりとて主人の宿守に、心のまゝ御宿申す事もかなひ申さねど、未だ夜も更けたりと云ふにも候はねど、暫し休みて後出立ち給へ、賤がわむら家入らせ給ふ所もなけれど、疲を休め給ふにはさりとて足り申すべし、いざ入らせ給へと、立上りて庭に下りたる氣配して、やがて靜に戸を押開き、いざと云ひつゝ立ちたる若武者の装を見遣りて、酷く驚き、思はず二三歩飛びひさりしが、流石逃げ隱れもせで訝り怪しみつゝ打護り居たり。アハレ春の花の艶麗なる秋の月の清澄なる其姿、肉は落ち身は疲せたれど、色は飽迄白うして玉の如き眼に限りなき愛を宿し、束ねても見ぬ黒漆の髪は脊の上に亂れて房やかに頬の邊りに落ちかゝり、恰も天宮の嬪姫の暫し下界に天降りたるかと疑はる。若武者も其意外なるに驚きけん、容易は内に入らで、眉をひろめて戸外に立竚み居りぬ。落葉婆娑として軒に音あり。かくて女は幾度か若武者の姿をためつすがめつ、見詰め居りしが、やがて少しく進み出でゝ頭より足元まで幾度も見あげつ見おろしつ、我に顔の色を變へて小走りに側近く走り寄り、鎧の草摺に縋り付きて御懐しう候といふ聲も、半ば涙の内に消えて、只さめ〴〵と泣き伏し

たり。

此有様に流石の若武者もひたと呆れ惑ひ、暫らく言葉なくして、髪の毛の襟元に震ふを見おろしたりしが、如何に思ひけん、俄に眉を昂げて凜々しき兩眼を濶と見開き、縋りたる女の手を拂ひのけてつッと身を避けて、無禮者、見も知らぬ御身に馴々しく物云はるゝ覺が御座らぬ、御のきやれ、尚附續はゞ許し申さぬぞ、兼て怪しき家と思ひしに、宿かる旅人を欺きて物を掠むる毒婦と覺えたり、よし、我に出逢ひたるは其方の不幸ぞ、覺悟せよ、刄に掛けて旅路の憂を除き、併せて其方が積みたる罪障を滅ぼしくれんと、腰の太刀に手をかけて今や拔放たんづべき氣配に、女はアハヤと身を避りて、はふり落つる涙を拭ひもあへず、お……お待ち下されよ、三郎殿、我身を、見忘れ給ひしか、皐月に候ぞ、皐月を忘れ給ひしか、かゝる所にて逢ひまつるは互に思ひもかけぬ事なれど、疑ひ給ふも理に候へど、是には深き由の候ふ事なれど、暫し、暫し御心を鎭め給ひて、我が申す事を聞しめせ、哺親家殿、と云ふ聲も涙と共に震ひ亂れて、身を悶へつゝ泣き倒れたり。可憐の女郎花雨に惱みて露重げなり。黒髪は小波を織りて土の上を靡けり。

時雨（その五）

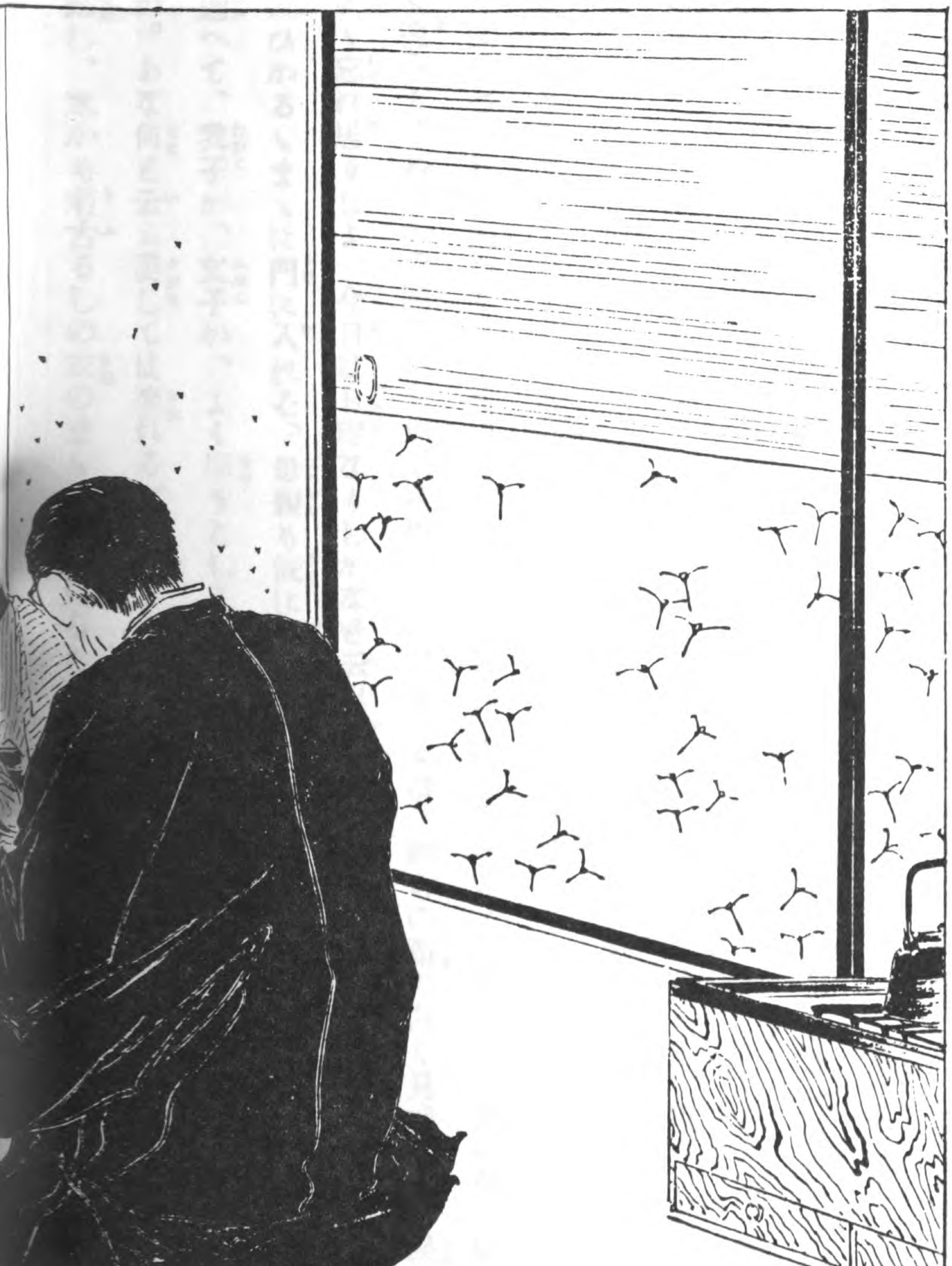
白魚女史

婦人は良人の家をこそ我家とすべきなれど、嫁くを我家に歸るともいふこそと、日來の敎へも、つや〳〵忘るゝとにはあらねど、おろかなる身の心至らず。母様の御心にそむきまつりて、知らず〳〵七去の一なる罪を犯しまつりし事、我身ながらはづかしう口惜しう侍るにこそ。今よりは母様の御敎に從がひ、我家の法にそむかぬやう心せんに、今日のみは、まげてもゆるさせ玉へ。此處を出でゝは、また歸るべき家の、何處の

野にか山にか侍るべき。今日のみはとて、文子がなきつ、わびつすれど、一度云ひ出るからは、よく〳〵のこと、あとへはひかじ、やみはせじ。如何に云ひつくろふとも、泣きくどくとも、もはやきくべき事かは。未だ嫁と云ひしにはなく、全くあづかり居りたるなれど、歸りしとて何の耻かしからん、よし祖父樣どちのかため玉ひたる緣とて、そはかりそめのはかなき言の葉のみ、なに結びとぐべきちぎりかは。とまれかくまれ、そのやうの者聞くべき席はあらじ、嫗どのとくつれ行かれずや、かく見るも、今は念わるやといひすてゝ、なほすがる袖を二三寸糸ふりきりて、襖へだて奥に入れど、文子はせんすべも知らず、おろ〳〵とばかり泣きまどふのみなるを、嫗は憎き鬼婆やと高らかにのゝしり怒り、喰ひ殺されぬほど、孃さま疾く〳〵と促し立つれど、あな何いふ。年甲斐もなき人かな、諸共にわびも云ひときもしてたまふが道なるものをけしからぬ鬼よばゝり。もの知らぬ者とて不禮も程こそあれと、促す袖をふりはらひて、ゆかじとすまふを、乳母は、なにけしからぬも無禮も人にこそよれ。角はへたるのみが鬼にはあらじいざいふことかは。幼き折りよりかしづき參らせし嫗、あしき事はゆめ申さぬものを、きゝわけなし、幾歳にならせたまふと、恚りつ、慰めつ、うながすに、文子も今は父母の力を賴むより外の道なしと、やうやくに心を定め、まち居たる車にうちのりたり。

思ひのきりのふつとふたがりて、野邊か、山邊か、西東行く先きも分かず、二里ばかりの道、うつゝともなく夢ぢをひかれて、其處よと車とゞむる嫗の呼び聲に心付けど、姊上がと云ひて、乘りたる竹馬をうち捨てゝ母への注進に、まづ、駈け入る弟の二郎。文子は車より下り立ち、嫗を見返り、一旦姑御とたのみたる母樣を、かりそめにも誰れにもなそしりそ、そしらむ妾を

あなどるなれど、ゆるさじ、必ずぞと云ひつゝ、つねはなつかしき父母の門の、今日ばかりは何となう恐ろしき心地もせられ、入りかねて、たゞずめど、姉様がこされしと、うれしや、めづらしやとて走り出る吉野、なつかしやとばかりに、袖にすがりつき、早う入らせ給へ、さるにても今朝の茶柱のようわたりし事よなどとて、妹もよろこび纏へど、われが早く見つけしよと、注進をうちほこりて踊りよろこび、はて、しかと抱きすがりて、笑みこぼれて見上る弟の顔見るに、文子は、中〳〵にはづかしう消えも入らまほしき思ひを、わざとほゝ笑みて、わづかの間ながら山里に居りて、日もほと〳〵忘れ居りしよ、今日は日曜なりしかなど云ひつゝ、ひかるゝまゝに門に入れど、母親も既に玄關に出で迎へて、我子か、文子か、よく早うこしよと云ひけるが。あな何と云ふ姿しては來れるぞ、髪もさばかりに亂し、しかも着古るしの衣のまゝ、人も見るらんに、かまはぬにも程こそあれ。婿も諸共にか。年甲斐もなき事よ。かばかりの事は心ろへてもくるべきにと云はれて。巳れを省れど、げに着ふるしの衣、しかも庭より下りたちたる庭下駄のまゝ、あまりに用意なかりしよ、母様のおどろき給はんもげに道理にと思へど、今更にすゝみかねてたゆたふを。何はとも、早うはいれよ、田舎は其方の好む處なれど、住みては中〳〵に心細からん。程もへだゝり居れど、二三日はとまり行きてよきならん。早う此方へこよ、乳母もとく休めよなど、いそ〳〵とする母親の顔、いつの程にか額による浪、頭らの霜の白く見ゆれど、涙のあとさへあざやかに見ゆるに、文子はかなしさにつけて、いとゞ不孝の身のかへりみられ、今またかゝる身にてこしと聞かれなど、何と思ばされん。まして此君よの歌を聞えもせど、どのやうに思ばさん。親を思ふにまさる親心、如何ばかりおぼしまどひ給ふらん。いつその事、道芝



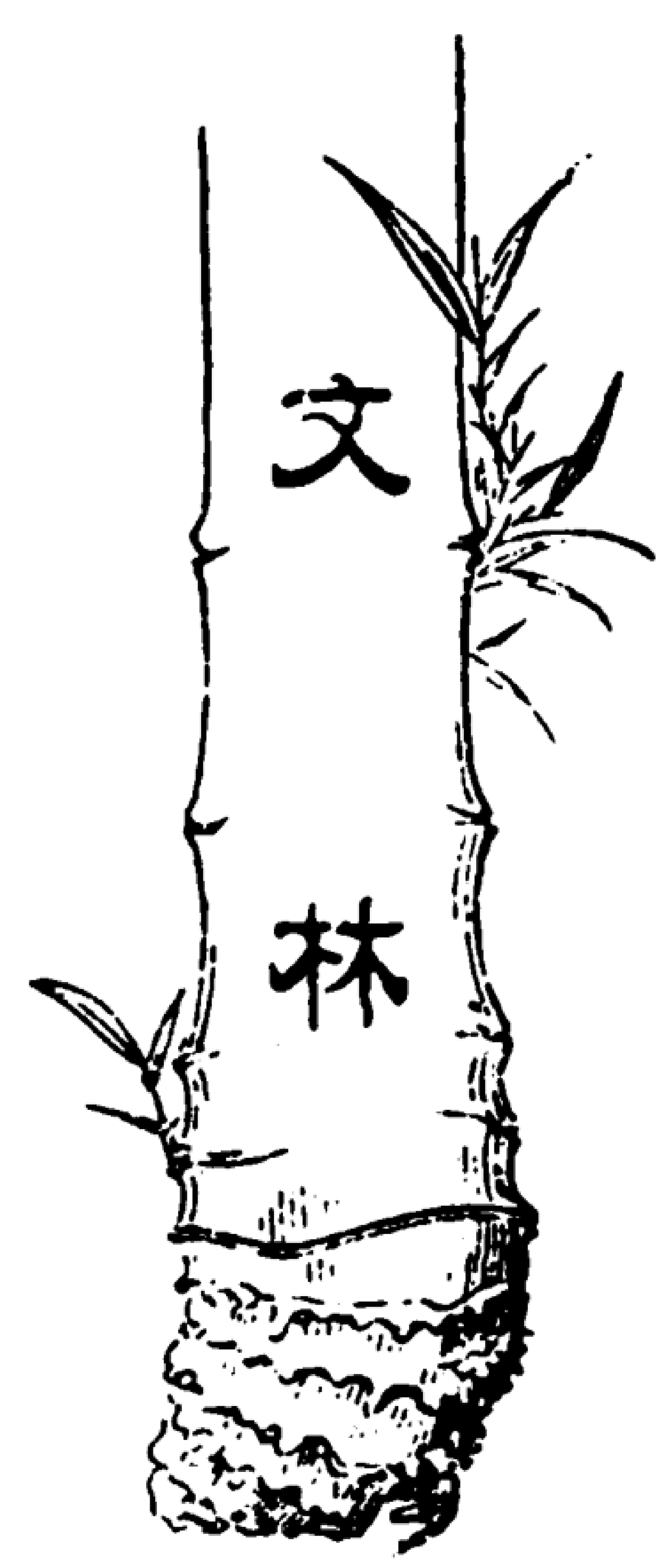


の露と消えもせで、かゝるうき思ひにはあはざりしに、さるにても人生婦人の身となるなかれとは、この事にころと思へど、涙のわきかへりて、何の言の葉も出でず、涙にかきくるゝを、母親はいかに汲みてか、之もまたむせび入りぬ。吉野、二郎は、左右にひしとより居てうちまもり、うちゑみて、はなれがたきなつかしさ。姉上もう何處へも行き給ふな、姉上まさずては、われたちも心細し。母様も淋びしげなりなどとて、弟も云ひ妹も袖をぬらすに、文子はいよ〳〵わきかへる涙せきかねて、袖もしとゞに泣き沈みしが、さつと思ひかへして、あな心なかりき。あまりに人々のなつかしさに、わけもなき露にむせびしよ。父君もすこやかにましますか。とく見えたてまつらむ、御部屋にましましてにかとて、母親を見かへれど之も涙をおしぬぐひて。如何に父君なりとて、この髮にてはおどろき給はんと云ひつゝ、文子が鬢をかき上げなどして、諸共に父の部屋へ行けど、父は讀みさしの書物をさしおきて、こは文子か。いだう早う來られしよ。あはたゞしげに、何の用事ありてぞ。姑御にも千太郎にも、變ることなくてかなどゝはれて、文子の心もやゝおちつき、事も侍らず。父君にも御壯健にとて、おくればせながら答へつゝ、母の彼方へ立つを見て、やゝ進みより、父上、誠に申わけもなき不調法仕りて、見たてまつる顏も侍らず。何とぞ、今度ばかりは、わびさせたまひてといひつゝ、姑の文をさし出し、うつむきて、またもかきくるゝ涙、五月ならぬに、いつしか亂れかゝる雲のけしき。空にもあはれは見ゆるらむ。父親は文をおとり上げひらき見るに、

兼ねてよりあづかりまゐらせ候御令孃文子殿よろづにやさしう大人しうかしづかれ誠にうれしう思ひ候へども何となう我家にはふさはしからず覺え候へど折角の御志には侍れどまだ結はぬを幸に御もどし申

上奉候返す〲いまだ千太郎とは一座にだにもれき参らせず出で入りのものにも他處のあづかり子とひろう致し置き候へど此後何方へ御かしづけ遊ばされ候とも差支御座なく荷物等は其内人目にたゝぬやう御送り申上ます〲わしからずおひきうけ被下度候別に深き仕細のありてには御座なく候へども何分にも妾が心に叶はず萬事は媼殿より御きゝとり被下たく候かしこ

と記るしあるに、父親はよみ終り、默然とうでをこまぬけど、いつしか戻りてきける母親のおどろきはさこそ。文子に何不調法などのあるべきと云ひさま、媼を呼ばんとするに、様子はかわりをりぬ、媼などを呼ぶなとて、父親は制しつゝ、たゞためいきつく〲とながめたまふ。



松上霞　　近衛忠熙

あしびきの山まつかぜの音までも
かすみこめたるあさぼらけ哉

柳垂水　　久我建通

かたよりになびく柳のいとみれど
垣のあなたにいけはありけり

橋邊柳　　鍋島直大

いなむしろ河ぞひやなぎ糸たれて
橋のうへにもかゝりけるかな

霞添山色　　高崎正風

いづくより立くる春かえらねども
遠やまのはぞまづかすみける

水郷霞　　長岡護美

青やぎのかげうちかすみ水無瀬河
　ともし火遠しやまもとのさと

海霞　　長谷信成

津の國の難波のあしのつのくめは
　うらのみるめもかすむなり鳧

折梅　　津輕承昭

咎むべき人もあらねど野づかさに
　薫れるうめををりてゆかまし

遠村柳　　前田利鬯

うら〳〵とかすむ野末に青やぎの
　みどりも深きやまもとのさと

春雨晴　　松浦詮

霞たち木のめはるさめけさはれて
　みどりになれるのべの色かな

原上霞　　小出粲

しほばらのいでゆの煙うちなびき
　かすみわたれるなすのしの原

早春柳　　遠山英一

いかのぼりうなゐがあくる春風に
　やなぎの糸ものびろめにけり

若菜少　　宮地嚴夫

淡雪をわけてひめもすつみたれど
　わか菜はかごにたまらざり鳧

雨中雉　　北郷久政

ふるあめをしのぎかねてや山畑の
　すゞなか中にきゞすなくなり

雨中花　　飯田武卿

しづかなるものにもさわぐ心かな
　いろさりやすき花のあまよに

源頼朝　　三浦千春

しほたれしひるの小じまの蜑が袖

つひには世をもれ渡ひける哉

鏡　藤井行麿

うつたから鏡てふ名は日のかみの
かけ見よりこそよび初めけめ

竹芝の浦にて　大畑弘國

たけみその浦風はやみこぐ見れど
ゆふ御けいろぐ伊豆手舟かも

机　岡部譲

かきつめむ玉藻もあらず年なみは
つくゑの島によゝかへせども

朝鶯　林甕臣

疾くにはにあまり立ちいでゝ鶯を
鳴かずなしつる朝ぼらけかな

夜春風　仝

柳にも見えぬたぼろ夜の春かせは
ふきぬる著しうめさける窓に

船を見て　龜谷行

眞帆にふく追手の風のはやけれど
こゝろ許すなあきのふなびと

富士山上氣候觀測者野中至氏を　東宮鐵麿

おのが身は冷え氷れども國を思ふ
こゝろばかりはもえまさる闌

しれる人のみまかりし日を遠き國にありて思ひ出でゝ　永石德文

しのぶれどぬさもたむけず心のみ
うみやま遠くゆきかよふらん

河上霞　近衞貞子

さしくだすうちの柴舟はやすぎて
かすみかくれに成にけるかな

のどかなる日濱べにいづ　鍋島榮子

大いそのまつ吹かせものどかにて
濱べにたえぬみやこびとかな

朝鶯　蜂須賀随子

あたゝかにねたるなごりの枕べに
朝戸あけよとうぐひすのなく

早春雪　柳原愛子

立そめしかすみは消てひさかたの
そらかきくらし雪ぞふる

山家梅　松平健子

うぐひすはみやこに出し山ざとの
垣根のどかにうめかをるなり

春朝　小池道子

ほのぼのとわけゆく花にけふも又
浮れごゝろのもよほされつゝ

野徑蝶　小笠原艶子

飛ぶ蝶にまじりてけふも遊びけり
すみれ花さく野べのなかみち

田若菜　原田蒼生子

あせあえて夏は苗とる小やま田に
賤もわかなをけふやつむらん

梅薫枕　高崎竹子

よもすがらねられざりけり梅の花
まくらに深くうちかをりつゝ

朝霞　鶴久子

さし出ておほぞら高くなるまでも
かすみにこもる朝づく日かな

園竹　中島歌子

ぬけいでし一ふしもがなそのゝ竹
たゞいたづらに繁らましより

朝霞　田邊わけ子

ほのぼのと富士の根ばかり明初て
かすみぞのべに夜を殘しける

折梅　仝

柴人のをりゝへて來しうめか枝に
み山のおくのはるをしるかな

早春　内田ゆか子

やまゝゝのゆきも霞にうづもれて
はるのけしきの見ゆる今朝哉

連日春雨　安東菊子

ひ數ふる雨のあまねくうるはひて
木の芽もはるの色に出にけり

山家烟　師岡すが子

ましらなく聲も淋しき夕ぐれの
山のまたいはけふり立つみゆ

名所梅　仝

名にしおふ梅津の里のはなざかり
こと木も匂ふこゝちこそすれ

霜　久後鈴子

翅にはしもやおくらんさしぐしの
わかつきさむく鴈ぞなくなる

雪達磨　高崎正風

高崎正風大人には去る一月廿日頃より顏面ロースに罹り澁谷村なる赤十字社病院に入り治療を受させたまひしが程なく病もおこたらせられ退院せんとする日紀念のためにとて一本の梅を園にうつしうゑさせ雪達磨と名づけたまへり今ろのかたはらにかいつけたまひしはしがきを得たれば書認めて貴社におくりまゐらす（遠山いね子寄）

おのれ丹毒の病ひにかゝり、此院に入りしは、去る一月二十三日なりき。滿面に黒き藥をぬり、薄綿もて包み、繃帶を施したるさま、鏡にうつして見るに、兩眼のみ黒くのこりて、さながらうなゐが作れる雪達磨に似たり。

おなじくはたましひ入れよ雪佛

と口すさみけるが、くすし看護婦達のねもごろなる數

護により、速に平癒し、けふしも家に歸らんとするに日ごろ病床のなぐさめにとて、家人共のれてこせたる盆栽の梅一もとを、紀念のためにとて、園中にうつしうゑさせけるを、かたはらの人々れなじくはよき名もがなといふに、とりわへず前の戯句にちなみて雪達磨とれはせつるは、明治二十九年二月一日のわしたなりけり。

わさがほのやのわるじ正風
しるす。

氷解

三輪義方

落葉もさながら、朽殘れる山陰の庭の苔の下に、いと有るか無きかに、音なひろめたるが、哀にをかしう、彼の西行上人の、道求むなりと詠まれけんも、かうやうにてやなど、れぼねて、常はものうき身も、やをられりたちて、わたり打ち拂ひて見れど、疊める石のわはひの狹きに、わりなく流れ廻れるもをかし。いと淺らなるものから、塵も濁らず、玉のやうにすき透りたる、世に潔しとは、か丶るをこそいはめと覺ゆ。いでや萬の疑も、其氷の如く、解けもていなんには、心の中も、此水の如くや、すが／＼しからまし。さるは柳をわたる春風のゆるらかなる心も、行河の絶ゑざる如く、怠なからんには、年月解けざりし、難き文の意も、岩切り通す水の如く、おのづから通りもて行きなんものをやなど、打思ひつ丶、やがて水滴に汲みて、硯の海に湛へつ。さて文机に打向へど、窓の外の梅、打薫りて、例のわしたにもまして、いとすが／＼しう。

軍人の妻女

末岡武足

食物にはよし飽かずとも、衣服はよし煖ならずとも、世にかくて生存ふることは、皆神の御惠に外ならず。されどれのれは、公務の暇わる毎に常に神詣して、ろ

の恩を謝し奉るなり。我住む邊近く、熊野の御社あり、おのれ、をり〳〵參詣するに、常に見受る一婦人あり、年の程は二十七八にもやあらむ。時に從ひ、世につれて、髪も梳けづらず、衣服の樣も飾りなけれど、何となく氣高く、優れたる處ありて、普通の婦人ともおもはれず。或時は、膚もさけんばかりの朝風に、髮の毛を吹せて神前にぬかづき、或時は、おく霜に袖もはらひあへずして、社頭の寒月に祈念を凝らし、その殊勝なる振舞は、神明も納受やし給ふらむ、と思はるゝばかりなり。

おのれ、いかなる人にかとおもひ、あやしみ居たりしに、此程、或友人の外國に行とて、おのれも、その留別の宴會に招れたるに、はからず、彼の婦人も宴會の席にあり、おのれ、始て婦人の素性を聞くに、富みたる家に生れたる人ならねど、心すなほにして、操正しく、去年征淸の役に名譽の戰死を遂げたる、陸軍大尉某君の未亡人にして、夫の遺愛なる三人の子供を、悉く軍人となして、夫の遺志を繼がしめむと、且暮その事にのみ身を苦しめ、心を碎き居るとの事なれど、神詣して祈念する心の程もをしはかられて、世に感ずべき婦人なりけり。おのれ、あはれさのあまりに。

　大方の木たちとは見じ雪霜に
　　いろかへぬ松のたかきみさをは

とよみいでたる歌をかきつけて、彼の婦人に贈りたるに、日本臣民たるもの、殊に軍人の妻女たるものが、當然の行狀を、さばかり賞め稱られては、おもはゆきかぎりなりとて、顔色うちあかめられたる、婦人の心の程こそいとゆかしかりしか。





●仁孝天皇五十年御祭　去月二十二日は仁孝天皇五十年御祭を宮中に於て擧げさせられたり。御式に參列せられたるは、彰仁親王、貞愛親王、威仁親王、載仁親王、菊麿王、邦彦王、守正王殿下を始め、伊藤内閣總理大臣以下、各省大臣、次官、黒田、東久世、樞密院正副議長、及び在京顧問官、近衛、徳川、岩倉、九條の各公爵、麝香、金鷄兩間祗候等にして、定刻午前十時、天皇陛下には正裝を召させて、出御あらせられ、御玉串を奉り給ひ、御拜ありて御告文を奏し、やがて入御あらせらる、次に皇太子殿下、御代拜として侍從前田青濘氏奉仕し、尋で參列の皇族以下、勅任官、麝香、金鷄、兩間祗候等、拜禮あり、同十時三十分閉扉一同退出せりといふ。

●逗子行啓　相州葉山に在し、皇太后陛下には、去る一日午前、三浦郡逗子へ行啓あらせられ、資生堂福原有信氏の別莊へ御立寄、暫時御休憩の後、庭前の濱邊にて隨從の女官を御對手に、貝拾ひの御遊あり、御晝餐の後、再び海濱を御散歩の末、午後三時頃、御機嫌麗はしく還啓遊ばされたり。

●東宮殿下　靜岡縣、桃郷御用邸に御避寒中なるが去月二十七日午前十時、御用邸御出門、馬車に召させられ、黒川東宮武官長御陪乘、御學友等供奉し參らせ、沼津町出口、永明寺に行啓あらせられたり。夫の羽衣の松等御覽、夫より千本濱に出でさせられ、御徜徉の後、頓て御還啓遊ばされたりと承りぬ。

●御膳部御献立　小笠原流の料理法を以て有名なる京橋區鈴木町石井治兵衛氏は、此程宮内省なる畏き邊

りの御膳部調理方指南を命ぜらる可き御沙汰ありしに、氏は身に餘る光榮なりとて、直に御領致し、毎月一六の日を以て、出省して御料理御献立の指圖を爲す由なるが、種々の料理中、氏が最も得意とするものは、大根人參などの野菜類を以て、鶴龜其他種々の美花を彫刻む事にて、其技の見事なる、畏き邊りにては、太く御賞揚遊ばされ、爾來御膳部には係る彫刻物の御献立なくては適はぬ事となりけるとぞ。

●嵯峨仙洞の菊が島　京都、落西嵯峨大澤池は、往昔嵯峨天皇の築かせ給ひし仙洞の庭泉にて、池中に菊ヶ島と名くる小島あり、天皇此島に百種の菊を培植し、其花を採て、瓶に插み、天地人の三才を作らせ給ひしは、本邦插花の濫觴にして、花道に由緒深き島なるが、近年此島大に破壞せるを以て、今回大坂の花道團体本部發起となり、同池を改修保存し、碑を建立して、插花淵源の紀念となす計畫ありと。

●美擧　このごろ貴婦人たち相はかりたまひて、義捐金を募集して海軍々人の遭難者の英魂をなぐさめ、かつは遺族の人々をもねぎらはんとす。美擧とたゞへつべし。其主意書なりといふをかゝくれぞ。

あゝ天に情なきものか、我が猛く勇しき海軍將士を恤まざるの如何に甚しき。前には第十六號水雷艇の漁翁島近傍に沈沒するあり。次に軍艦大島が端艇の淡水河に顚覆あり、後に軍艦廣丙の倉島近傍に沈沒するあり、而も同じき明治二十八年の中に同じき臺灣の方面に於て、斯る大刧を降せしは、抑も何故ぞや。思へば悽絕愴絕、胸塞がり、袖沾ふ許なり。玆に傳へ聞ける其の概況を擧れば、五月十一日、第十六號水雷艇は、漁翁島小頭角沖を進む折激浪怒濤の爲に、顚覆せられて、千仭の水底に沈み乗組員十六名の内三名のみ九死に一生を獲、其の餘の人々は悲慘の最後を遂けたりと云ひ、九月五日淡水河の

暴に漲れる時、大島の水兵身を挺し水雷艇の危難を赴き助けんとて、端艇を卸し如山怒濤を侵し、漕出行まもなく、覆りて逆卷く浪に押流され、九名中の八名は水底の藻屑と爲りぬと云ひ、十二月二十一日、廣丙は倉島附近の世に知られざる暗礁に觸れて沈沒し、艦長以下四十二名は救はれたるも、三十七名は遂に溺れ逝きぬといふ。天晴皇國の爲に身もたなしらにいろしみはげむは、素より軍人の常職とはいへ空しく海底に葬むらるゝ當時の胸中は如何なりけん推量るに忍びぬかぎりなるを、妾等の特に同情もて愍み、惻むは、諸士の遺族の人々なり、或は子として父として夫として、其の成功を祈り、無事を願ひ、凱旋を待ちたる父母もあり、兒女もあり、妻もありつらん。硝烟彈雨の下に死せしならば、聊か慰む所ある可きに、斯く成果たれば、其の愁傷は如何ばかりぞや。實に不幸の限りにこそ。妾等心に忍びざる所あれば、如何にもして其の不幸の萬一をも慰めばやと思ひ、傅く義捐金を集め之を頒ち贈ることゝは爲しぬ。あはれ妾等の志を贊け、生者を勞り、死者を慰むる厚き意もて、進みて捐金を賜らば、何の幸か之に過ぎん。

主唱者（姓名いろは順）伊東美津子子爵祐亨夫人　伊藤房子男爵夫人　井上光子男爵夫人　林與根子海軍中將夫人　東鄉天津子海軍少將夫人　樺山登茂子伯爵夫人　川口榮子男爵夫人　高木富子海軍々醫總監夫人　角田勇子海軍少將夫人　中牟田梅子子爵夫人　赤松貞子男爵夫人　相浦辰子男爵夫人　西鄉清子侯爵夫人　佐々木貞子伯爵夫人　實吉錬子海軍々醫總監夫人　鮫島峰子海軍少將夫人　柴山琴子海軍少將夫人

（追て義捐金は來る四月三十日迄に東京市京橋區築地一丁目一番地水交社鈴木長光へ御送附被下度願上候）（郵便爲替は東京芝口支局へ御取組被下度候）（義捐金取纏め御送附の節は爲替料及郵稅共同

金内を以て御支辨被下差支無之候)

●嵐山の保勝　口に京都の名勝を言ふもの嵐山を推さゞるなし。然れども惜むらくは、元治元年七月、同山上、山田法輪寺は、長州藩の陣營となり、無慘にも薩軍の燒拂ふ所となり、山上の櫻楓其災に遭ひ以來面目一變、風光轉た寂寞たり。故中山信夫翁、伊勢華翁等は大に慨歎し、廣く同志を求め、楓櫻松三樹の苗木植付に盡力せられ、故有栖川宮を初め、三條岩倉の諸公、夫々苗木を寄附せられ、専ら其勝景を補はれしも、昔日の嵐山を描出するに足らず。戸那瀨瀧の邊り淺黄櫻、西行櫻の枯死以來、老櫻次で廢朽し、頗る勝景を損したるを以て、京都小林區署は之を惜み、明年度、農商務省 官 林保護費中へ、櫻楓樹各々三千本買入[illegible]額を込組まれ度き旨、大坂大林區署の協賛を經て、農商務大臣に稟議したれど、同省にても多分許容すべし因に記す、同山は渡月橋南詰より一町半ばかり、(藏王堂白龍神社以西大悲閣の稍西方迄)は官山なるも其他は民有林なれど、小林區署も如何に保勝の心あるも、之に干渉する能はず。從て一層頽廢するの傾あるを以て、京都の名望家は、勿論、市參事會並に葛野郡長等の協力によりて櫻楓及松樹を夥多に栽培せられむことを希望し居れりと、唯に京都小林區署のみならず、蓋し國民擧げて熱望する所ならん。

●文部省檢定試驗　文部省にて募集中なる、尋常師範學校、同中學校、高等女學校、教員檢定試驗の志願者は、九百名餘に達し、中には數十科の檢定を望むもの少からず、掛員は非常に繁忙の由なるが、聞く所に依れば、同試驗は來四月十日より着手する都合なりと

●日本語講習生の撰拔　文部省にて此程來募集中なる臺灣教員は、各地方よりの出願者、續々增加し、已に六百余名に達したるが、同省にて候補者として撰定したるものは、百余名に過ぎず。尚此内より三十七

名を撰拔し、日本評講習生として、來る十日頃迄には任用すべき都合なりといふ。

●高等女學校生徒募集　女子高等師範學校の附屬高等女學校にては、一昨年より規則を改正して尋常小學科を卒業したるものを、第一年級に入學せしむることとなりたるが、本年は各級に多少の闕員を補ふために、生徒を募集し、特に高等小學を卒業したるものを入る、四年級には、四十五名募集するといへど、高等科卒業生にして猶一層の教育を受けんとするもの丶爲めには、好都合なるべしと云ふ。

●烈女せん子(父子共に忠死す)　播磨國、姫路市、北條口十番地士族高島豊次氏は、去る明治廿五年徴兵適齡となり、仝地第十聯隊、第七中隊に入り、去年四月征淸の途に上り凱旋まぢかくなりて、十一月二十五日、淸國李家屯に於て、北邙一片の煙と化しぬ。氏の父は小野德太郎とて、姫路舊藩士にして、文久年間、正義黨に組し、同藩士河合惣兵衛氏と各藩の同士に交通して、東西に奔走したるは、恰も維新の際にして、氏の妻女即豊次氏の實母せん女の如きも、密かに夫をたすけ、彼の惣兵衛氏の割腹の間際まで、飮食をはこび、密事をうけつぎしたりとなむ。(後河合惣兵衛氏は特旨を以て贈位の恩典ありき)、其後小野氏は家財を抛ち同志の輩をたすけ、其力によりて今日迄榮位につきたるもの亦少なからず。されども氏は之に誇ることなく、只國の爲め盡しつ丶ありしも、兎角世事意の如くならず。後大阪に居住し、明治七年一子豊次氏(時に三歲)をのこして死せり。これより後せん女は亡母の後をつがしめんとて其生長をたのしみしが、交るところの子弟は、皆利益の爭ひのみなれど、子を敎ふるところにあらずとして、舊里なる播磨飾東郡宇佐崎村にかへりしも、遊ぶところ農事の眞似なれどとて、再び去て今の處にうつり、せん女が平素嗜める琴、生花、茶道、

裁縫等を以て家事となし、只管教育怠らざりしかど、實に孟母三遷の教と均しく氏も亦よく母につかへ、十二三の頃より仝市の渡邊致精氏につき學文を修め、傍ら擊劍を好みて、姫路育英館に入り、又鹿島翁五郎氏につき、與儀を極め、暇ある折は和樂の笙を好み、人をして耳を側てしめむにより、身を立て老母の心をなぐさめんとするにあたり、入營せしがかねて文武ともに衆に超ゑ品行方正上官の命令に從ふを以て、翌年上等兵となり。尙軍曹に選拔せられんとせしも、老母を養ふ人なければとて、固辭して受けざりしが、日清戰爭に際して、清國大連灣に上陸して以來各地の守備として屯在し勤務に餘念なかりしが、凱旋まぢかくなりて、敵なくも病の爲に死せしが、此報姫路なる慈母せんの耳に入るや、非歎き一方ならず、父といひ子といひ共に死を遂げたるのみならず、氏に一人の伯父あり。河合宗久といふ、これも亦維新前姫路を脫し、長州に至り奇兵隊に入り、小倉城を落せり、後維新の際京都に上り、某公卿の爲に殉死せりといふ。されど今は一族皆國のために死して、跡をつぐものなく知るも知らざるもなく、皆老母の不幸を憐まざるなく、遺骸の到着するや、盛なる葬式を行ひたりとなむ。此頃仝氏と元仝隊にありし某其不幸をきゝて、せん女のために詠みたる歌一首あり。

よろにきくわれさへかなしはゝろむの
母のわかれよいかにありけむ

●伊豆のおとづれ

なにがし伊豆の伊東にあり、このごろ消息しけるはしに記しつらく、園輝子（當五十歲）（麻布に女學校を造りをる人）は伊東に五百圓ほどの地所をかひ、今日登記もすみたりとぞ。是はかの學校を此地に移して、且は老後を安樂にくらす爲なりとぞ。さて學校の基本金募集の爲めにやあらん、近々再び洋行せらるゝとぞ、當時伊東滯在中も洋服を着しを

られ、ものめづらしくれもふかまの子は異人の來れるとおもへるもをかし。自らは日本の異人なりとて去やれて申さるゝなり。げにさもありけり。といふ、げにてろさもあらめ。

●外國婦人日本畫を學ぶ　米國、海軍大佐シブツン夫人は昨夏我國へ來遊し、滯在中、跡見玉枝女史に就きて、日本畫を學びけるに、技藝上達して、殊に櫻花を畫くに巧みとなりしが、夫人は歸國の後も南窓淨几を拂ひて、毛筆畫のすさびに餘念なく、外國には無き國の千朶萬朶咲亂れたる櫻の花を畫き、此ぞ日本漫遊の土産なりとて、知れる人々に贈りなどしつ、一には師恩を記する形見と爲しけるを、キング孃と云へる親友の珍らしき事に思ひ、御身日本にて如何なる人に畫の道を學びしや、滯留の間長くもあらざりしに、さても御器用の事やとありけるに、夫人は玉枝女史の事より、我學び得たる次第まで落もなく物語れど、キング孃も床しき事に思ひ、幸ひ我父は今日本東京に監督敎會の宣敎師として滯在し、妾も近き内に日本へ遊ぶ筈なれど、御身と同じく女史を師と賴みて、畫の道を學ばんとて、昨年十月日本に着するや否や、直ちに玉枝女史を訪ふて、シブツン夫人の事を語り、今後我にも親しく敎へたまへとの切なる賴みに、女史も快よく承諾し、日を約して一週三四回、門人を遣りて筆の使ひ方、畫の具の溶きやうを敎へさせ、女史も一週に一度づゝ永田町なる孃の家に至りて、懇ろに敎授しけるに、指頭の使用至つて鈍きは、外國人の習なるに、孃も彼シブツン夫人と同じく、殊の外器用の性質なれど、進歩も早く三月の後には、花鳥の姿美しく畫き、山水の景にもをさ〳〵拙なからぬやうになりけるが、今少し筆路確かになれど、箱根に遊び、媚山明水の景色を寫生して、本國の友人に贈らんとて、昨今修業に餘念なしとぞ。

●富士の雪　本年は珍らしき大雪にて裾野一面積ること三尺、

●川田剛氏の逝去　近來碩學鴻儒の世を去るもの踵を接すさきに岡松翁逝き小中村博士逝き、今また川田博士の訃音に接す。博士客歳より僂麻質斯及び肝臟病の氣味あり、一月に入りて病篤く、相州葉山なる皇太子殿下の御許を辭し、牛込なる自邸に歸り、療養中藥石効なく、二月二日遂に逝く、氏は舊備中松山藩士なり。天保元年六月を以て生る。幼より穎悟、稍長じて贄を同國の碩學山田方谷翁の門に執り、吃々業を修め、經史百家窺はざるところなし。衆推して才となす。後東遊を命ぜられて昌平校に入り、また藤森天山翁に遊ぶ、當時氏の文名已に海内に嘖々たり、然も徒に尋章摘句の腐儒に非ず。幾もなくして召還され、藩の重職に擢用せらる。戊辰正月伏見鳥羽の變あり、藩主徳川氏の親近なるを以て官兵の攻むる所となり、社稷將に危からんとす。氏乃ち身を脱して私に京都に入り陳情甚だ努む。嫌疑漸く氷解す。藩主をして百世に廟食するを得せしめしもの一に氏の力なり。維新後召されて大學教授に任ぜられ、帷を城北牛込に下して子弟に教ふ。門下知名の士を出す尠からず。後宮内省四等出仕たり諸陵頭、東宮御用掛に累遷し、貴族院議員に勅選せられ、文學博士の學位を授けられ、漢學の大家として中外に重ぜらる。不幸二豎の侵す所となり、その病革るや、特に御物を賜ひ、宮中顧問官に任ぜらる、榮と謂ふべし。

●四つ兒　豐前國、京都郡、行橋町、字行事といへる處の商賈、草野安次郎といへる人今年廿八歳なるが妻はお清とて廿四歳なるとのなかに此のほど男の四子を同生したりしが、母子五人とも壯健に肥立ち居れりといふ。他日同胞四人同時に國家の干城となる、父母たるもの意を强うすべし。

教の庭

三月五日　兼題歸鴈

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　　播磨龍野　眞鍋直子

ゆくかりも深きかすみにまよふらん
　わけやらぬ空にこゑのみたるゝ

地　　大坂市西區南堀江通三丁目　清水わい子

歸るかりこゑのみたかくほにわけて
　くものなみちにおとろきぬゆく

人　　信濃　小町谷里ゐ子

書き殘しゆくかりかねのたまつさは
　うはのそらにもよまれさりけり

人　　本郷區台町三十二番地　三浦とき子

このはるはなみ風あらしきたの海に
　か漿るかりかねこゝろしてゆけ

人　　高知縣土佐郡小高坂村二百五十九番地　楠瀨兎女子

殘りゐてわたなるはなをなけかしと

はやくもかりはれもひたつらん

花咲かんはるを見すてゝゆくかりは
　いかにちきりてかへりそむらん　佳山靜子

さく花のさかりみすてゝふるさとの
　ここよへかりのなにいそくらん　永井さい子

春のそらこてふはばなにれふれるを
　みすててかへるあま津かりがれ　佐々有鄰子

ふるさとの花にやいそくきよふけて
　かすむみそらをかりかへるなり　磯部つや子

ふるさとにいそく雁こそさかりなる
　はなのにしきをきてかへるらめ　靜岡みつ子

かりかれは春のもなかにかへるなり
　散りゆくはなを見るやわひしき　丸山すま子

みれつゝきにほへる花のかをりをは
　つはさにしめてかりの行くらむ　鈴木みね子

みよしのは花のさかりさこし路なる
　ひさにかたらへかへるかりかれ　牧野さき子

咲きにほふ花を見すてゝかへるさは
　いつの世かりのちきりそめけむ　進藤もさ子

あなゆかしこゑを霧にのこしおきて
　くものなみわけかへるかりがれ　佐々小琴子

はるさいへはなへて心のたゆめるを
　なにおもひたちかりのいぬらん　南大路正子

さくらさく春を見すてゝひさかたの
　そらゆくかりのこゑをきくかな　南大路芳枝子

やまさくら月もにほへ●このゆふべ
なにをかこちてかりかへるらん
安井草子

なく聲もかすみにむせてきこゆなり
いまはさかへるかりのひさつら
佐山幾子

すみなれしみやこの空をよそにして
たびたつかりはいつちゆくらん
小野田くに子

咲きいつる花のさかりのゆふはねを
見すてゝかりはいつちゆくらん
貫井そめ子

うるはしき花のみやこをふりすてゝ
かすみわけつゝかりかへるなり
宇田川よし子

花のみかはるのおほろのつきもよし
なにをうしさてかりかへるらん
小野田かま子

こき交しやなきさくらのみやこさへ
かりは見すてゝなさかへるらん
小野田さく子

ちる花もはるもさまらぬみやこさや
おもひすてゝもかりかへるらん
小野田ひで子

春かすみたつやみやこのはなにさへ
ちきりつられてかりかへるなり
岩崎ふく子

やがて咲く花をもまたであまつかり
なにいそぎてかへりゆくらん
小玉きん子

みやこにもまさらん花のあれはさか
いまはさかへるかりのひさつら
宇田川うめ子

花おほろつきもかすめるこのゆふべ
見すてゝかへるあまづかりかれ
太田やま子

春の夜のあめのなごりも見ゆるまで
貫井たま子

更けゆくそらにかりかへるなり

いめ人の伏見の田井にちきりおきて
はなのみやこをかりかへるらん
小野田きよ子

久かたのくもゐはるかにこゑすなり
つらもみたさてかへるかりかれ
石井こめ子

咲きに匂ふ花をみすてゝかへるさは
こゝろしられぬあまつかりかれ
平澤ふさ子

月のよにはれうちかはしかりかねの
なくこゑさへもかすむはるかな
山本澄江子

あつさゆみ春はこしらにかへるかり
いつのよよりのちきりなるらん
松尾萬子

かりがねは花のさかりを見すてつゝ
ふるささしてなさかへるらむ
中野八重子

遠さかるこゑをしるへになかむれは
くもちをかへるかりのひさつら
山根久子

いまはさておもひ立つらん春かすみ
おほろつきよにかへるかりがれ
續木かめ子

ふる里をわすれかれてやかくばかり
はなを見すてゝかへるかりかれ
久松鈴江子

山の端もかすみにこもるはるの日に
ふるささしてかりかへるなり
佐治房子

ふるさとの春にこゝろやいそくらん
みやこをよらにかへるかりがれ
大久保歌子

おほろなる月さはなさをよそにして
かりはいつこにゆかんさすらむ
奥原ふく子

うくひすにこゝろおきてや花さくさ
まづかへるらんかりのひとつら　田賀愛子

さくらさくみやこを外にかりかれは
こし路のそらをいそきゆくらん　諏訪晴子

なきてゆく聲きこゆなりかりかれも
はなのわかれやかなしかるらん　前澤幸子

はるかすみへたつる空にかへるかり
いつくをさしてくもちゆくらん　粟田口信子

あけはまた花にわかれのうしとてか
あかつきふかくかへるかりかれ　小野寺たけ子

かりかれのかすみかくれのひと聲や
こしぢにかへるなこりなるらん　武田榮子

かりかれの蹤はかすみにかききえて
こしちのそらにこゑのみそする　澤邊清淑子

今はとてゆきふるさとにたつかりも
はなのみやこやたちうかるらん　大竹治子

さく花にこゝろとゝめすゆくかりは
のとけきそらにおもひたちけむ　鳥飼千重子

立ち籠るかすみをわけてたど〳〵と
かりかへるなりみねかくれして　杠秀子

なか〳〵に花にわかれのつらしとや
なく〳〵かへるはるのかりかれ　名取正代子

其かさはさすかに見ねてほの〳〵と
かすむみそらにかへるかりかれ　小町谷園子

おくれつゝ一つらかへるかりかれは
はなになごりやをしむなるらん　高瀬孝子

ふる郷へいそぎながらもかりかれは
さきにしはなにこゝろのこらん　高瀬烈子

こゝろさへうきたつ春をいとひてか
あきをちきりてかへるかりかれ　瀬戸榮子

のどかなるやよひの空のはなの香の
かすみわけゆくかりのこゑこゑ　出田香川子

去年ききしはつ雁がれにくらぶれば
わかるゝこゑのあはれなるかな　田代艶子

朝かすみたちかくしたるやまのはに
こゑをもらしてかへるかりがれ　仁保基子

ふるさとのこひしさまさる夕そらに
うらやましくもかへるかりかれ　波多野喜代子

うす墨のゆかみの文字と見ゆるまで
おぼろつくよにかりかへるなり　東條甲子

住みなれしみやこをあさに雁がれの
みちのくさしてなにいそぐらん　島田悦子

ひゞ〳〵に北の海さしてかへるかり
ゆめなわすれそくにのまもりを　德武美子

空たかくともよひてゆくこゑきゝて
なれにしいけのかりもたちけり　羽田三緒子

こし路にもさけはみやこにます國の
ありとしられてかへるかりかれ　河田いし子

よひかはす聲もおぼろにきこゆなり
かすむくも井をかへるかりかれ　河野文子

あかつきのをくらき空をゆくかりは
うこかぬほしやしるへなるらん　　白井きよ子

すみなれし門田のかりもかへるなり
ひさのこひしきたそかれのそら　　遠山峰子

かへる鴈みおくるほとにあさかすみ
かすみはてゝもあくるそらかな　　西村登羅子

入あひのかねにおさろきたつかりは
にはかにかへるこゝろつきけん　　濱口信子

うくひすはねくらにかへる夕くれに
たちてゆくなりあまつかりかれ　　成田延子

花さりのいろの長閑けきはるの日に
ゆふくれかけてかへるかりかれ　　水島貢子

久かたのくも井かすみてほのかにも
見わたすそらにかへるかりかれ　　木村敏子

さき揃ふはなにこゝろのうつりてや
いへちわすれしあまつかりかれ　　松原常子

雨になるゆふへのそらのうすかすみ
しをれてかへるはるのかりかれ　　中島房子

花のかにゝほふ今よひのつきかけを
なさふりすてゝかりかへるらん　　楠精子

山のはのかすみはてたるおほそらに
こゑはかりしてかへるかりかれ　　浦島亀子

ゆふくれにみ空を見れはあはれにも
つはさならへてかへるかりかれ　　野田千代子

おほそらを語らひかはしゆくかりは
またこんあきをちきるなるらん　　荒井清子

花咲かんやよひのそらをよそにして
さほさかりゆくはるのかりかれ　　芝田源子

みるか中ちに聲も聞えす成りにけり
おほそらたかくかへるかりかれ　　大島あい子

うなゐ子か指さすそらにさをさなり
かきさ成りてもかへるかりかれ　　町田鶴子

歸るさもあさなわすれそはるのかり
またこんあきをちきりおきても　　吉川貞子

ふる里をおもふねさめにきこゆなり
はなに名こりのあまつかりかれ　　神田樂子

いさゝしくみやこの空のこひしきに
うらやましくもかへるかりかれ　　青木しけ子

いかならんちきりありてか故さとに
はるごさかへるあまつかりかれ　　遠藤梅子

さくはなも惜くやはあらぬ久かたの
くも井はるかにかへるかりかれ　　町田繁子

なきわたる影見ぬまてたちへたつ
かすみに消ゑてかへるかりかれ　　吉川くに子

あさ月の名こりかすみてやまのはを
かへりわつらふかりかれのこゑ　　長島綾子

音もなくこさめふるよを立ち出てて
みわたすそらにかりかへるなり　　長島諒子

天のはらふりさけみれはくもになく
たまつさならてかへるかりかれ　　水島淸子

ふるさとの花にこゝろやいそくらん
　みやこのそらをかへるかりかれ
溝口寛子

なにゝこのみやこの花をあとにして
　さほきこしちにかりのゆくらん
西村菊子

夜をこめて霞む田のもに立つかりは
　いつこにやとを借らんとすらん
越山雪子

ちるはなにうきをみしとや霞みつゝ
　かせなきそらにかへるかりかれ
岡田波子

ゆふやまにわかれもうきを花おそき
　こしちをさしてかへるかりかれ
曾山道子

咲く花を見すてゝかへるかりかれも
　かすみて見えぬゆふくれのそら
島田好子

ちる花にうきを見せしとゆふまくれ
　しつこゝろなくかへるかりかれ
溝口奈保子

春かすみたちおくれしとふるさとに
　いそくかりのともさそふこゑ
川田こら子

わかれそと思へはかなしひとこゑを
　そらにのこしてかへるかりかれ
小幡千代子

夕まくれかすみをわけてゆくかりは
　いかにふるさといそくなるらん
山田ゑい子

ひとこゑをかすむ雲井になきすてゝ
　名こりをしけにかへるかりかれ
小幡富貴代子

こん秋をちぎりゆくらんかりかれの
　いそぐたびぢにこゑをのこして
粟田口貞子

春かすみくもゐはるかにかへるかり
粟田口秀子

　なほふるさとのはなやこひしき

おもしろきおほろ月夜にあくかれて
　こよひとかりもおもひたつらん
牧野眞子

咲く花をよそに見すてゝかへるかり
　ここ世のはるやいかにこひしき
牧野峰子

折しもあれ夕くれちかくゆくさきの
　いつこをかりのやとゝかはする
牧野千止子

わかさとの花をこしちのゆきにみて
　たちとまるらんかへるかりかれ
黑澤榮子

ふるさとに花を見すてゝゆくかりの
　つはさにかすむはるの夜のつき
小野田のぶ子

さほひめのかすみの袖のひまもれて
　こゑもおほろにかへるかりかれ
有坂せい子

今はさてふるさといそぐかりかれの
　なこりにかすむかへるさのそら
鷹野榮子

またもこむ秋をちきりてかりかれの
　くもちはるかにかへりゆくかな
土岐末子

かへる雁いそくこゝろもたゆむらん
　過ぎ行くみれのはなのあたりは
植木鋼子

花も見てかりかへるなりしかすかに
　こし路のそらやこひしかるらむ
矢野うめ子

てりもせすくもりもはてぬ春の夜の
　くも井はるかにかへるかりかれ
龜井しげ子

今はさてこし路へいそくかりかれを
　つきもみおくるあけほのゝそら
仁井田富子

春さめのはれまをまちてかりかれは
こし路をさしてかへりゆくなり　北村貞子

つはくらにやよこさつてよ歸るかり
かものやなぎはもゑいでにけり　山本きよ子

きかまほし來る春ごとにかへるかり
はなにまされるものはいかにそ　岩城まつ子

しかすかに花になこりををしむらん
なのりてわたるかりのひとつら　藥師寺雪子

さく花にこゝろとゝめすかりかれは
いまはとなさかおもひたつらん　山崎しつ子

いまはとてかへりゆくなる鴈か音は
はなに名殘のをしくやはあらぬ　梅澤やす子

かりかれの雲井をわたるこゑすなり
はなのさかりをあとにのこして　淺賀俊子

をちこちの花のさかりをよそに見て
くも井はるかにかりかへるなり　淺賀花子

春ごとにしづこゝろなきかりかれの
こゑもかすみてとほさかりゆく　碓井信子

春くれはゆきふるさとへいまはとて
かすむくもゐにかりいそくなり　碓井武子

かにかくにしはしはとまれかへる雁
わかふるさとにふみやつてまし　碓井和可子

わかれちのなみたなるらん春さめに
なきかはしつゝかへるかりかれ　里住こま子

おほろにもかすめる月をなかむれは
つはさきゆくかりのひとつら　北村孝子

かすみたつみやこの空をあとにして
かへりゆくなりあまつかりかれ　北島まつ子

あまつそらかすみたなひく春の日に
なにいそくらんかへるかりかれ　北島こと子

かりかれも花のさかりはさなからに
見すてかれてやなきわたるらん　上柴琴子

今はとてはなを見すてゝゆくかりも
さすかにそらをすきかてに鳴く　上柴絹子

有あけのつきにのこしゝひとこゑを
はるのなこりとかへるかりかれ　藤林ます子

さくらさく高ねをそれとすきかてに
かすみをわけてかへるかりかれ　後藤のぶ子

さくら花咲くをもまたていそきゆく
かりはいつこへ立ちかへるらん　内田たけ子

ふるさとはいかに戀しきものならん
さきをたかへすかりかへるなり　内田はる子

春のよのまたあけやらぬおほそらを
かすみかくれにかりかへるなり　筧清子

あまつ空かすみにきゆるかりかれの
こゑの行く方やいつこなるらむ　筧政子

春くれはおのかまに〱ふるさとを
さしてそいそくかりのひとむら　筧光子

こん秋をいかにちきりてしらゆきの
ふるさとにしもかりかへるらん　梅原ふて子

さきは猶あるらむものをまさかりの
　はなをあさにもかへるかりかな　琴陵　八千代子

今はさやおもひたつらんはるかすみ
　たなひくそらにきゆるかりかれ　玉井　隆子

ほの〳〵さ見ねこそ渡れかすむよの
　つきをのこしてかへるかりかれ　西村　登美子

月おほろはなおもしろきはるなれや
　みそらにかへるかりもたゆたふ　吉田　登代子

契りおきし里はいつくかしらくもの
　はてなきそらにかへるかりかれ　岡田　もみち子

ふる里にまつらんものをこゝろなく
　いまはなしましかへれかりかれ　田津木　久子

見おくれは三つ四つ二つかへるかり
　ひさこゑこさにさほさかりゆく　久松　勢伊子

風わたるみねにたなひくむらくもに
　たま〳〵みねてかへるかりかれ　重松　たか子

澄む月にはつかりかれのかすよみし
　あきのあはれを忘のふはるかな　矢野　高子

咲き匂ふはなのさかりをよそにして
　あなこゝろなくかへるかりかな　久門　利恵子

さほ姫のかすみのころもきならはて
　おのかこしちにかりかへるなり　穗積　稔子

ふるさとの春やいかなるいろならん
　はなをみすてゝかりかへるらむ　中村　のふ子

花のよをすてゝゆくへはしらゆきの
　みやこをあさにかへるかりかれ　赤羽　若枝子

をしめとも花をのこしてかへるらん
　こゑさへかすむあまつかりかれ　赤羽　菊見子

あけほののかすめる空にかへるかり
　なくれもいよゝさほくなりぬる　西尾　直子

花みては名こりつきしとおもひけん
　やみよをかけてかへるかりかれ　服部　かつみ子

さす方のおほつかなくもこゑ〳〵に
　かへるやかりのつらもみたさす　星野　かす子

しら雪のふるさとゝほく行くかりは
　はなさくはるや知らすあるらん　甲斐　荘優子

あけもせは花のいろかにまよはむと
　よのまにかりのかへりゆくらん　武山　英子

ゆくかりは花のさかりをよそにみて
　ゆきふるさとにおもひたつらん　佐々　歌子

ふる里をこひしさいそくかりかれは
　おのかくににもはるやきぬらん　川崎　みき子

むさし野の殘りのゆきをあさに見て
　こし路をさしてかへるかりかれ　小曾根　しう子

つらなりし中におくるゝかりかれは
　はなの名こりやをしむなるらん　戸塚　てつ子

空に立つかすみのせきのあたなれや
　こゑらしのひてかへるかりかれ　諸井　くら子

古さとのゆき消ぬ間とはなの咲く
　みやこをあさにかへるかりかれ　吾妻　ちか子

久かたのくも井はるかになきつれて
かすみかくれにかへるかりかね　池谷とみ子

花のさくみやこのはるをあとに見て
ふるさとこふるかりのひとつら　大谷津こと子

雁かねもなれしみやこは立ちうしと
かすめるそらを鳴きかへるらん　山本いと子

聲もせてかすみかくれにかへるかり
をしむこゝろをそらにしるらん　たてわきます子

春くれはかすみのうちにこゑはして
そらともわかすかへるかりかね　土肥仙子

すみよしと名にたつはるの濱邊にも
とまらてかりのなどかへるらん　三浦たま子

かすむ夜の月になく〳〵ゆくかりや
はなのわかれををしむなるらん　井上ひろ子

咲く花にわかれやつけむかりかねの
かへれとまたのあきをちきりて　服部ゆか子

花さそふゆふべのあめのはれまより
なれしかとたのかりやゆくらむ　大島折枝子

故さとのちきりや深きかりかねは
みやこのはるをよそになしつゝ　山室ふく子

群れてこし友におくれてたゞひとり
はななきさとにわたるかりかね　江澤なか子

いつくかと仰きてわたるかけみれば
かすみにきゆるはるのかりかね　土井もと子

聲きけばかへるならひのかりかねも　宇野きよ子

しはしとまれはなをねくらに

名殘りなう鳴きて過きけむ歸るかり
こゑをかすかにそらにのこして　鵜見貞子

花もみすかすみもまたで行くかりの
こゝろははるのかげなかるらむ　青本辰子

やがてちる花をうしとやおもふらん
さかりをすてゝかりかへるなり　田中とみ子

花と云ふはなのさかりにゆくかりは
ちるをうしとやいそぐなるらん　大久保道子

見おくらむ方もしられすかすむ夜に
こゑさへきえてかへるかりかね　梶井久子

花のかをつはさにしめてゆくかりは
ゆきのこしぢにはるをつくらむ　八太光子

古さとへかへるかりこそたのしけれ
われはまなびのみちなかばなり　青木春子

春きてもこし路のはなは咲かなくに
なにいそきてやかりかへるらん　井出信子

春かすみなびくを見るやかりがねも
いまはとそらにおもひたつらん　太田貞子

年ごとになりもたがへずかりがねの
かへるいへぢやよるもいぬめり　松野みさを子

みこし路のゆきふる里をしたひつゝ
つらもみださてかへるかりがね　春野ことじ子

さきいつる花をみすてゝかりかねの
なにをうれしみかへりゆくらん　河野多加子

あつさ弓はるのなかめをよそにして
　よしのゝやまをかへるかりかね　河野八重子

忘るなよいもせのやまをかへるかり
　またこんあきのゆふくれのそら　村山志津子

うちむれしきのふの友におくれてや
　あけかたちかくかへるかりかね　廣田さめ子

ふくかせのちらさぬさきと雁かねは
　はなのさかりにかへりゆくらむ　林　久子

ひさかたの雲路をかへるかりかねは
　あきをちきりてなきわたるらん　卜藏茂江子

うちむれて空のさかにもかへるなり
　はなにこゝろをとめぬかりかね　卜藏さきよ子

なきてゆく方やいつことなかむれは
　かすみに消ゆるはるのかりかね　卜藏こま子

咲きにほふ花を見捨ててふるさとへ
　世をかりかねとなきかへるなり　卜藏吟子

れに鳴きて雁もゆくらむうちかすみ
　それともみえぬはなのあけぼの　津田德子

ふるさとは戀しきものかさくらさく
　はるもみすてゝかりかへるなり　勝部しう子

のどかなる春のひかりを羽にしめて
　かりやいつこにかへるなるらん　松井喜代子

見ねかくれかきつらなりてかへる雁
　かすむくもちにふみまよふらん　牧村ちよ子

咲はなにわかれやつらきふるさとに
　かへりわづらふかりのひとつら　德川萬壽子

三月五日　兼題　野遊

天　　芝區三田綱町　八太　光子

春の日かずのつもりゆくまゝにをちこちの高ねのみ雪もいつしか霞のおくにきえて朝けの風もぬるみゆけば庭の小草もやう／＼けしきたちて青綻しきたらむやうなるに野べはいかならむとこゝろにゆかしう思ふ折しもさる山里にすめるめのとのもとよりうしろの野べの土筆いとよきほどなりといひおこせぬいとうれしうて親しき友どちをかたらひつとめてものするに道すがらすみれたんぽゝなどの咲きみだれたるもいとをかし田中の道をゆきつくしてふと見やるあなたに大なる八重櫻の花はまた咲きいでずして蕾のみいと多きがたてる前に柴垣まばらにゆひめぐらして山吹の八重ひとへさきこぼれたるをかしとめとまるはかの家なりけりやをら立ちよりて音なへばいみじう喜びて早くより待ちたてまつりぬ家つとさはにね給へとて小さきをみな子にあないせさすしばしいこひて後打ちつれてうしろのかたへ立ちいづるにうら／＼と霞める空には雲雀の聲いとれもしろし打ちわたすのつらはまた穗にいでぬ畑むきの緑の波をよするひまに鈴菜すゝしろ咲きつゝきて目もはるなり土筆生ふるは少し小高き岡へにてゆか

り色こきつぼすみれの匂ふ中に打まじりていと多くもゑ出でたりおのがじゝこゝかしこに立ちわかれてあるは土筆あるは茅花萠などゝ心のまゝに摘みとりて遊ひ興するほどかたへの麥生に雉子の羽たゝきて飛立さまに一聲打鳴きたるいみじうめづらかなりかたみに歎などよみかはして春の日の長きも覺えず芝生にうつる影のいと長うなりしに心つけばたづさへし籠にもこぼるゝばかりみちにけりさらば暮れぬほどにとをしき思を殘してかの家にかへりはこりかに籠をしめせば家人打ゑみて遊ひ給はむ料にとかねて里の子らにもふみあらさせでしめおき侍りしなりといふに

かねてよりけふをまちつゝしめし野の
　心つくしをつみてかへらむ

人　播磨龍野　眞鍋　直子

いとうらゝかなる春の日の光にそゝのかされ心も浮立ちつゝ野べの遊ひやいかにとたまあへる友垣うちつれつゝいてゆくにゆくての道の柳の打けふり吹くとしもなき風になひきあひたるいとをかしやがて野べにいたれはおもひしにもまさりて霞の深う立こめたる空に雲雀の聲の聞ゑまだ咲出てぬ花の梢に鶯のさへづりあへるなどとり〳〵にいとゆかしかなたこなたあこかれつゝすみれつみつはなぬきなとしてあそふほどに春の永き日もいつしか暮れ待つともなき夕月のかげのほのめけるはまた似るものもなくてなん

人　長野縣長野町　太田　さだ子

柳櫻をこきまぜし都の錦はしらねど春の野づらのながめは又一しほにこそと一日あけばのゝ景色只ならぬに村肝の心もうかれ出でつゝゆくとしもなく春の野づらにいでぬかぜのどやかにふきわたりて柳の糸の打ちみだれたるにひばりの聲をかしうなき出でたるつばなまじりのすみれの床に小蝶のむつれあひたる野末の原に雉子の聲するなどいづれめでたからぬかは若草のつまさへこもれりといひけんもいたうなつかしきをまして野守がいほの梅もやう〳〵綻び初めてそこはかとなきうつり香の袂に通ふなどさすがにふりすてがたくてながめゐたるほどにいつしか長きを賴みし日もくれ果てゝむかひの山には月さへ出でぬいざかへらんとするに呼子鳥の聲立てたるなど家路の急がれぬもことわりにてなん

いまはとて家路をくればよぶ子鳥
　うしろのはらになきわたるなり

佐々有鄰子

青帝の石禁なしてさほしろき野中の小川は　花の涙立かへり遠里なのの

青柳は豊年の煙かとうたがはれ澤邊の蛙は艸がくれに聲たて 大空の雲雀は高くまひかなでいとゆふのいとのどけきこころなれば中がきゆはえ心あひのともどち袂ふりかはしといた つまつくしつままくつぼすみれの床しめてすがのれのながき春日も玉のをの 短かくおぼえてかきろひの夕となるをもしらず父母のまちたまふらん ことをもわすれはてゝ遊びくらしつる野べの春けしきは心のそこにしみつきてなん

山本澄江子

友どちと鶯の聲する方へと行きければ青海原かと 疑ふばかりに青み立ちたる麥畑に黄金の花かとばかりなる菜種の咲れるいとうつくし風のまにまににほふは遠方の山邊にたなびける霞の奥の櫻花か 心高く御空にまへづるひばりのこゑも 野芹つむ少女の鄙歌もいとあはれなり見るにつけきくにつけ長閑き春の光りかながく 泰平の御代に生れ長閑き春に遊ぶも誰が御惠ぞと友の戲かすにつけても徒らに 遊びに耽るべきかはとて各我家さして摘みにし若菜の籠を 持ちつゝ歸りゆけば照りもせず曇りもはてぬ朧月夜となりにけり

奥原ふく子

彌生の空の長閑けきにいかで終日文机の下 にうちくらすべきと親しき友等の誘ふまにまにうち連れたちて 近きあたりの野へにさまよひ出てぬそよ〳〵と吹く春風は柳の絲をくりかへし處せきまで咲き匂へる草花はさながら毛氈をしきつめたるが如し 青々と萠え出たる若草をふみ分けつゝあるはゆかりの色をなつかしみ すみれの花をめづるもあれは其名もゆかしき櫻草をとあつむるもあり あるは蓮花草あるはたんぽゝなどおもふまに〳〵つみ集めつるうちに菅の根の 長き春日のはやくれ方近くなりぬるも心づかで浮かれありきしはいとをかしうなむ

磯部都屋子

窓のうちにとぢこもりてふみよみ 居たれどやゝものうくなりたればひるすぐるころより近き野邊にと出でたちぬこの日 空いみしううらゝかに青柳の糸の行く手のかたにうちなびくは われをまねくに似たりこなたにきこゆるは鶯のこゑにしてかなたに あがるはひばりなりいづれもいひしらずおもしろきにすみれなのはな とり〴〵にさきみだれたるなど春のにしきをわけゆくこゝちす猶 そこはかとなくあくがれありくほどにさとえならぬかをりをおくれり こゝろもとなきまゝに霞をわけてとめ行けばしろたへにはたくれなゐに 咲きにほへる梅の木立なりけりこゝにも人來〳〵となくなるこゑいとうるはし

霞めともうめのかをりをたつねきて
われよりさきにうぐひすのなく

などやうにうたひしがさすがにやさしうきく人もやと返り見すれば長き日かげもやゝかたぶきたりつく〴〵とおもへば花も鳥もおのが時とし なればかく色にいでこゑをいだして人のこゝろをなぐさむるをこの身は幾年を重ねて もおなじことなるはいかにぞやいでとくかへりて今日の文にてもかきつゞらんとおもふうちに 日またくくれぬ家にかへるやがてともし火かゝげこの文をかきたるものから 色も香もあらぬをいかにかせむ

鳥飼千重子

雪の旦月の夕いづれ哀ならぬにはあらねど なほ春こそ人の心もうきたつものなれうら〳〵とわたる霞の匂ひののどかなるに今は若草ももえいでけん頃を只にすごさんも口惜しういでや 心なのべにと思ひたちて相しれる友どちを誘らひて倶に物するに野も山も 見渡す限りもえ出し色こくあれは今更のやうに驚かれてあはれ いつのまにかはと打ちつぶやきつゝそこらいざよひつゝ見れは澤水の滞なき汀に眞菰草さへ萠え

いでぬ柳の髮のふくとしもなき風に打なびきつゝ水鏡に姿をつくろふ心地せらるか志唐歌にも氣はれては風新柳の髮を梳り氷消ては波舊苔の髭を洗ふと詠しゝやがてかゝる景色をこそいふならめ雲雀の聲は霞の中にあがり燕のねもほのかに聞ゆ柔き草を衾に心地よげに犬のねふれるさまいづれもいとゆかしかなたこなたに少女子の袖ふりはへて若菜つばなゝどつむにおのれらもさて菫などぬきつゝ歸さ忘るゝ折から夕月の影に驚き打つれて歸りぬ

たちそふる霞の中をあこがれて
こゝろなのへにすみれつみけり

名取正代子

つみまぜてゆくのゝつばなつぼすみれと門の前わたりすぐる人の口ずさむをきくにげにうらゝなる此頃の野邊の景色さこそと思ひやられてなんけふは學びのいとまにもあれはたれこめて春の行方志らざらんも本意なかるべしいざ見にゆかんとおもふどちうちむれて近きわたりの野邊にいでぬ麥生少やう〳〵青々たるかなたには鈴菜すみれをはじめつばなたんぽゝつく〴〵し其外名も志らぬ草花などおのも〳〵きほひあひて咲揃ひぬげに野邊こそ春のにしきといふべけれこてふはよろこばしげに花より花にまひあそびつゝわれらの志るべがほなりひばりは麥生のひなに心のこしつゝもみそらに高くあがりさてはいづこやらん聞ゆる鶯の聲などいづれをかしからぬはなしとやかくさめであひてそゞろあるきしつゝ日の暮るゝころほひ家にかへりぬやがてふしどに入りぬれどまたしも野邊に遊べる心地のするはゆめなりけりとあまりにあくがれたることのわれながらをかしうてあくる朝かくなん

嶋田悦子

凡樂しみと云ふ樂みの中には種々様々の事あり琴瑟笛簫の美音は耳を樂ましめ寶玉錦繍の美色は眼を喜ばしめ山海方丈の珍味は口腹の慾を滿たしむされど此等のものよりけ高き樂みは天然の美にこそありけれさては其天然の美を賞するには如何なる事のよきかと問はゞ野邊の遊に如くものなかるべし春の日和暖き折などに親しき友どち或は姉妹兄弟打つれなどして野邊をたどりたらんには遠近の花の盛りを霞たなびく間より眺めて其心地よきこと得も言はれぬが上に朗かなる鶯の聲にて耳さわやかに洗ふが如く知らず知らず歩みを運び萠え出づる綠りの草を分けふみて眺めよき丘のほとりなどにて携へしわりご開きて物たうべんには其味ひよきこと大牢の珍味も替ふるに物かはかくてこそ耳目口の樂みのみならで心を養ひ氣をれらせおのづから樂みの中に生を厚うするの道にも叶ふらめ噫世のひめたちよ野邊の遊は實に樂中の樂みならずや

牧野貞子

春もやう〳〵深くなりゆくまゝに霞がくれになく鶯のこゑもいとゞをかしく疑はず程ちかき野べに至りて見れば彼方此方に人のむれゐて若菜つむもありつばなぬきつゝ友よびかはす少めもありて學びやの一むれにやあらんうなゐ子らの聲うちそろへて君が代の初春うたふもいとらうたし見渡すかぎり青たゝみを敷きたらん様に菫たんぽゞなどさき〳〵をかしう生ひいでたる中にはわらびの一本二本も打まじるめり見るもの聞くものにつれ世のうさも忘れはて萬代もよはひをのぶる心地しつそこはかとなくあくがれつる程にいつしか入相つぐる鐘に驚きかへり見れば折しもねぐら爭ふ百鳥のこゑかしましく夕かすみさへたな引きそめたる又一入のながめなりかし

北村貞子

たへがたきさむさもやう〳〵うすらぎてはややよひちかきころとはな

りぬ今日はそらはれてうらゝけく ひごろちぢにみだるゝ思ひもきえうせてなにとなく心うごきてそとてな 思ひ立つなりしもたがおもひもおなじ物かしたしき人たちのおとなひて野べにものせはやいかにといざなはるゝにねがふことと夫よりうちむれて 近きあたりの野にまかりしにきのふまではゆき霜にとぢられし 八千草もけふののどけさにもえいでて草つむわらべはをちこちに 見ぬまのあたり森のこかげにたてる梅は今をさかりと咲きにほひちらさぬ ほどにふく春風にきよきかをりを送りてそが枝にうぐひすのうるはしくさへづる 聲ひばりのあまたさゝめきあふ聲みるもきくもたのしき ことのみにて日かげの西山にかたぶくまてうち興じつゝあそびたりけるに 野遊びほどたのしきことはあらずなん

わかなつむをとめも家ぢいそぐらん
たもとのちりをはらふゆふかぜ

御代忠子

今日は兼ねてよりいと親しき友どちと 野遊なさんと待ちに待ちにし日曜日にてありければ朝とくより起き出て 天氣いかにぞやと障子ひきあけ空の模樣をながむれば 嬉しや空にひとむらの雲もなくうら〱とさし出し朝日かげに心も心ならずいそ〱とおのがしたく整ひて友のおとづるるをのみ待ちゐしにやがてまもなく門への方に聲の聞ゆればいと嬉しうて門に立ち出で皆皆連れ立ちて 野邊に行きぬ見ればこぞのあれ野とは事かはりてわらび すみれたんぽゝなんど交りてげに錦の席をしきたらん樣なり時々暖なる風の吹き來る 心地よさいはも言はれずあまりの面白さにこゝかしこに散ばりておのがまに〱打ち興じ日のくるるをも知らでありしがふと空を 見れば日は西の山の端にかくれ今までさへづり居し鳥もねぐらに 急ぎ折しもきこゆる鐘の音に 驚きておの〱家路に歸りけり

遠賀健子

うらゝかなる春の光りに野山の雪も とけわたりおのがまに〱若草の萠え出にし頃を空しう過さんもいと 口惜しうてこゝろ隔てぬ友どち二人三人うちつれつゝやがて八千草 のみどり引なす野邊に出づれば見渡すかぎりうすくこくかすみたなびきて いとものどけきかなたこなたに百千鳥空にさへづる聲も床しう花の香さそふ 春風のそよふくまゝにこゝかしこに袖をつられてあるはすみれ をつみあるはよめなたんぽぽなどとり〱に歸さも忘るゝ折から 遠山寺の入相の鐘かすかにひゞくにおどろきて心ならずも袂を分ち家路をさしてかへりけり

碓井信子

霞ならぬ心もうきたちていとのどかなる日までのうちにのみこもりゐるもうみはてぬれば近きわたりの 友どちとちぎりてほど遠からぬ野邊にゆきぬげに四方は一面にみどりを そへ小鳥ものどかなる日をめでつゝこなた彼方にとびありきうなゐ子の 歌ひつゝつくしすみれなどとりあそべるさまいとのどけし おのれらもやがてうなゐ子の中にまじはりてつくしすみれなどあまたとり あそべるに日もかたぶきぬればをしきたのしみを野邊にのこして

のどかなるあさぢが原にうちむれて
すみれつみつゝけふもくらしぬ

といひ〱夕つ方かへりぬ

北村孝子

きのふけふうらゝかなる空に心うきたつはるのけしきいたらぬくまなく園生の梅も香をそへてさそひかほ なるうぐひすのこゑにひかされ童と二人三人伴ひて宿ちかき 野へにいでてしにゆきまの若菜あをやかに

もねいで又小川の ひまなるせりのこゝかしこ時しりがほなるを手のつめたさも袖のぬるゝをもいとはてつみため 居れはおのつから生ひいでたる四方のくさきも花さきて 百千鳥のこゑこゑにさへつり又みね山にはかすみわたりてそのたのしさいはん かたなくつたなき言のはにつくすへきやうもなけれは千の一をかきしるすになむ

上　柴　絹　子

麗かなる春の日に野邊をそゞろありきするはかり 長閑けきことはあらし葎の門立ちいでゝ野邊打ち見渡せは 紫雲英蒲公英菫花など咲き匂ひたる美しさいはん方なしましまして霞のうちになく 雲雀の聲いとゆかしくはた遠山の眉のこと 霞めるなとねもいはすなかしかく見渡す折からやよと呼ひかけらるゝに振りかへれば心 あひたる友たちなりけりうれしくも來合せ玉ひつるものかないざ今日は思ふ 限り此處に暮さむと共々に打喜び心隔なく菫花摘み つばなぬきなどして樂みあへる心はさすがに春の日のごと長閑けしとものどけし然るに 椿の根の長き春の日もやう〳〵末野の方より暮れ初めて 遂には家路わき難きまで暮れはてにけりあな心なの樂やかく 思ふとちあれば今日は暮れずもあらぬかとつぶやけばいづくともなくいなとよといふ 聲すあやしみ見れば美しき上臈の白き衣にふかき紫のうちきかけたるが 立ちておはせりさていひいで玉ふやう吾こそは春日野をはしめこの武藏野は 更なり大方の野邊にはなべて庵をもち侍れ今日しも早う 日暮れにけれは幸ひ一夜の宿をかし參らせん遠き古人も吾を尋ね來て 一夜野に明し 玉ひしこともあなればきみたちもいざ玉へと袖ひき玉ふあまりの いぶかしさにとみにいらへも出で來ずいかがはせんと躊躇ふ折しも目覺め玉へ 春野の君より御文まゐれりとわらはめのさしいたすを拔き見るに

昨今の長閑けき春の日をいかに過こし玉ふらむ 野邊の景色今そさかりとなる人傳に聞き候まゝ 例の日暮の里の庵に參りなり候へとも獨のみながむる宿の春の日はとも暮れかたきとの 言の葉實にもと思ひ遣られ候いかてとくおとなひ玉へよ

とありあはれ春の日の 長閑けきあまり暫時まどろみてかゝるはかなき夢を見しものかいでこれよりまことの野邊に 放心れむとあらば夢の中なる上臈に親しくあひまつりふりにし 當時のさまをも問ひまつり猶なつかしき語草つみいでむとこそあめれとやがていでたちぬ

筧　清　子

軒端の梅にうぐひすの 音づれそめしあしたより長閑にわたる春風に野山の雪のあとなく消ねしきのふけふ 野邊のけはひはひとしほならんとそゞろに心浮きたちてたゞにのみ 過ぐさんもいと口惜しければひと日心あへる友どち二人三人いざなひ合ひて 朝霞と共に出立ちけり其日いとうらゝかにて百千鳥のさへづる 聲さへこゝかしこにきこゑて岸邊にたてる風見草はおのれひとり風知り 顏に打なびきていと床し道すがら互に語らひつゝいつしか草青き野邊に分入りぬ 若草はこゝかしこに萠え出でゝ見渡すかぎり こくうすく得もいはれぬ 長閑さにおのがまに〳〵口すさみつゝつ花をぬき或は菫をつみあるは 又土筆を手折り日ねもす野邊にあくがれてかへるを忘るゝ 折から永き春日も暮れそむる鐘のひゞきに驚かされて諸共につみにし 若菜たづさへて家路何方とかへり見れば夕ゐる霞野邊を隔てゝ立ちこめたるもいと心にくし

田　津　木　久　子

降りつゞきたる春雨のなごりなう 晴れわたりていとうらゝかなるにそゞろ心もうき立ちて幼きわらはべどもをいざなひ 野へにと立ちいでしにかのつれなかりし春雨のなごり目に立ちて見渡す 限り青々と萠え出でし若草の中に いとゆかしうすみれの 咲きにほひいかめしげには、

まきてづくつくしの生ひ出でたるも　いとなかしそこはかとなく霞める空には百鳥のさへづりあひてとり〳〵いとなつかしき中に幼子のいとうれしげにあるはつばなぬきあるは　すみれつみあるは鬼よこよ〳〵こゝまで來ませとあされくつがへり　よろこびあそぶさまのをかしさもかゝるゆかしき野邊にまた一つの　花をそへたる心地のして歸るさ忘れたりしも夕がらすの心ありげなる聲に驚かされつゝ　幼子をうながして

西尾直子

かすみ立つ春のけしきにおのづから　心ゝのどけくなりにけりいでや野に出でゝ己が心をおぎなはばやと　おもふ心もうき〳〵しておしまづきさへはなれしもしらずゆくての道　をぞたどりけるあなたこなたを見わたせば四方のやま〳〵　一きはめでたく野もせにもえ出づる若草ゝ青々とさきほふさまみねていと〳〵をかしそよ〳〵と　吹きくる風もにほひめでたくとみれば梅の林の　枝もたわゝに咲きにほふ花にたはむれいとむつまじう鶯の遊べるありやよ　一聲なりともきかせてよとおもふおりしもいともうれしくさへづりけり　今一聲をきかまほしきものとまち〳〵てながめせしまにつひに日もくれければ心殘して歸りけり

靑木辰子

春の日の長閑さに老も若きも心浮き立ちて　昨日今日主なき庵ぞ數多き己も翁ならねど風の便にたぐへて通　ひ來る花の香をしるべに家を出で秋の夕虫の音聞きし野邊に出でぬ白雪はまだ　鹿の子に殘れど四方は早や霞棚引きて吹く東風もいと暖かく月かげさへ　うらうらとさして心も何となくうき〳〵しうなりぬ足の向ふままに何處ともなくさまよへば子の日逃れし小松は緑いや深くて千歳の色を　あらはし雪のひまよりさし出でたる若菜の摘みなん人を待ち面　なるもをかし霞の奥に鶯の聲繁きを尋ねよれば二株三株の　梅紅白打まぜて今をさかりと咲き居たり互に枝さしかはせるほとりは織りなし　たる綾ともあやまたれ散りにし花は蓮花草のさかりかとも　見ゆ近づき行けば鶯の梢より梢に飛び移りてなくなどいと興多きに野守も　今日のみはゆるせよと一枝手折ればなしとや鶯のしきりに鳴くも面白しいで　歸らめと細道たどり行くに日うけよきむきはたんぽゝすみれなんど咲ひ　出で春の光りも此邊よりこそとあはれになつかし家なる幼子へのつとにもと　摘めば知らぬ香のさとにほふなど床しくもゆかしかりき

大久保みち子

春の日影のうららかなるに霞ならぬ心も　浮き立ちて心あへる友どちうちつれてかすみ深く立ちこめたる　野邊にと分け入りぬ見る目はる〳〵と遠方の山の端のけふりたるに雲雀の聲の　聞ゆるも床しうこそ昨日の春さめに一きはの色ましし若草をかき清めつゝ　やがてむしろにとやすらふほどにげに春のかたみの花つく〳〵し色も　若紫の數くさに早蕨公などとり〳〵にこき薄　きさては一とつらの花むしろしきたらんやうにて美しと云ふ許りもなきにましてぬるき　春風の折々に花の香さへ送るに身は花に狂ふ胡蝶ならねどもとざせる霞　の内よりもれくる千鳥の聲の道しるべにあこがれてなほも　深くさまよふ折からいつとし登りけん夕月の影あざやかなるに驚きて

はるがすみたびなく野邊にあこがれて
さやけき月の影を見るかな

楢瀬兎女子

此頃のいとのどけさに催されて　かすみならぬ身もそゞろ浮き立ちおもふどち打ちつれ立ちそこはかとなく野邊に　あくがれいでぬふくとしもなき春風になよなよと打ちなびく　靑柳に心ひかれあるはいひしらず花のかをりみちたるかすみのおくに鶯のさへづるも　我をよぶにやあらん

と思はれあるは花にたはむるゝ 小蝶をおひつゝおもはぬ方にたどりゆけばすみれの人待がほにやさしうゑみ綻びたる かたはらにつくしの我はがほなるをならんとすれは床をはなるゝ 雲雀たもとより立つ心地してとり〳〵におもしろきにかへ さわすれしを遠山寺の入相に打おどろかされて一人が

くるゝもしらで遊ひつるかな

といへば

おもふとちすみれ咲く野にあこがれて

など口すさひつゝおぼろにほのめきたる夕月 におくらるゝも心斗りは野邊に殘してなん

梶井久子

八重たちこめし野邊の霞をかなたに分け こなたにたどればまねく青柳わらへる花も我がためにかと嬉しきに 聲のどやかに歌ふ鶯ゆめ樂しげにねふるこてふましていはんかたなしや されはけふ一日はかげろふともなりてあそびくらさばやと心も空にまふばかりたのしくもおもしろくおもほえて鳥ならぬ身も歌ひ かれまじく蝶ならぬ身も舞ひかれまじきにあたりにおふるさわらびつく〳〵しとては若紫のすみれの花などすてて歸らんもあたらしければ いざとてひとつふたつ摘むほどに野寺の入相のかね近くきこえてかすむ夕日は 端山に入りぬ皆の根とかいふこの頃の日も遊べばかばかりにみじかきものかとすずろうち見やれば ありし人々も心々にわかれ行きて名殘惜しさは 限りもあらねど花の下ふしすべき身にもあらずとはいへ夕やみ のたど〳〵しきにひとりかへらんことのいとさびしくて

ながためにはる日も暮れぬいざさらば
かへるさ送れ花よこてふよ

つれゆかましや

畠山ちよ子

此頃の日かげの長閑なるに遊ならぬ心も空 にうきたちて野べのさまのみゆかし宿に 心よりの友ふたりみたりとふらびきていざたまへちかきあたりの野べのつぼすみれ今さかりなりとて 白妙の袖ふりはへてゆく人もさはなるにまして思ふとち うちむれゆかんは一しほならんとそゝのかされそゞろにうかれいでぬ 里はづれにあまたのあげまきがいかのぼりあげをるさまもまづいといとけしや いづらすみれさくあたりはなどいひつゝわけゆくに芝生の床をはなれつゝ 空にあがるひばりのこゑかすみがくれの高岡になくきゝすもいとあはれなり 里のうなゐどものたもとにたまるばかりつみつゝるはわが ものせしつばななるをといへばまたひとりがいふやうわれこそ 先きになどうちつぶやきあふもいとをかしかくてつばなまじりに かたみにたまるばかりつみたればまたこんひとのためにもとてるしおきぬげに 一夜ねにけんみやびをのすさびもたゞならずゆかしうなむ

春の野ののどけき空にうかれつゝ
心いたらぬくまなかりけり

畠山ゆき子

うらゝかなる春の光りに野山の雪も解け 渡りおのがさま〳〵若草のもえ出でたる比をたゞにのみすぐさんもいと 口惜しうてあまたの友どち打ちつれつゝ霞の深う立ちこめたる 野べに分け入る彼方此方に小鳥のほのかにさへづりあふもいとゆかしう 花の香しむる朝風のぬるく吹くまゝにいつしかまとゐもみだれつゝ こゝかしこに袖をつられてつく〳〵しをぬくもありあるは うす紫のすみれをつみ其ゆかりにつとも たけたるわらびを折るなどとり〳〵 かへるさ忘るゝ折からかすかふ夕

月のさし出つれば今夜は雲雀の床をからんなどいひつゝかへりきつ

もゝ千鳥さへづる野べにあくがれて
　がすみに匂ふ月を見る哉

牧村ちよ子

降りつもる雪にとぢられ火桶をのみたづきに過ごしつる此頃もやう〳〵にぬるみゆく空のけしきを見てかすみならねど心もそゞろにうき立ち近きわたりの友ども引つれ外出すやがて里ばなれの田畠のをみちをあゆめば積りにし雪もむら消ねて清き小川のはたなどに根芹の育くもね出でたるいとめづらし童らはいみじうよろこびあひ細き指もてつみきそふさまいと興ありおのれもともに田の畔に居りたちてつむに氷れる土の猶く堅きにゆび先のあからみたるもをかし野づらふく風は未だひやゝかなれば稚兒らの身に恙やあらんいざかへらんと稚兒たちをそゝのかせば皆々ほこりがにつみたる若菜さゝげもて來てこはけふの遊びの家づとを得たるも野守のたまものなりと笑ひ興じておの〳〵の家には歸へりぬ

松野　みさを子

昨日けふまがきの梅も匂ひそめ古巣をいでし鶯は枝うつりして幾聲囀り友よぶも春の光りにこそあれ庭の草木も南の枝葉はみどりをふかめ千曲川風もいさゞぬるみしものとがなるにいたづらにたれこめんも口をしと友のいさなふまゝにさらはとつれ立ちて近き野邊をたちもとほれば春風の髪の亂れをそよかすもをかしく百千鳥の聲はをちこちの梢にきね雪消のひまにもねいでしすゞな根芹の時しりがほなるもまだうらわかき二葉にしてつめども籠にはたまらず唯手のこゞね袖のぬるゝもわするゝまゝに日影はやゝかたふけばまたの日をちぎりつゝさき草の三葉四葉を家づとにとて歸りぬ

河野たか子

かれて友どち三たり四たりと語らひ日曜にはちかき野べに一日遊ばゞやとちぎりおきにたる日も今日となりにければいつもよりとく起き出でつとかくするまに友どちみな音なひ來ましゝかばいざとてうち連れだちて出行く道すがら菫などつみつゝもいつしか原野にこそはつきにけれけふは日和ことにうらゝかにて見渡せば一帶の山々うすがすみて若草のきざしまだ色あさく谷間の梅も今をさかりとさき出でぬらん時々鶯の聲に送られてゆかしき香りを覓ねぬをちこちに雲雀なきかはしものとして見るも聞くも面白きけしきかななと語り合ひ皆々打興じてあちこちありきける折しも雉子の鳴く方に烟の立つけはひなればやがて

野やきするけふりの下に立ちかねし
　雉子やいかに子を思ふらん

なと口ずさみつゝ家路にこそはつきにけれ

寄山祝　武山英子

君か代のためしなりけりよろつよも
　かぎりしられぬかめのをのやま

早春山　牧野貞子

のどかなる春のひかりも見ゆるかな
　あさ日にゝほふゝしのしらゆき

雨中柳　同人

ふる雨にたちもねやらてかはそひに
　なひくけふりややなきなるらん

嶺松帶霞　牧野峰子
きゝなれしかせの音さへたえはてゝ
かすみこめたりみれのまつはら

閑居春　小幡ふみ子
さもまちてけふもくれぬゝわか宿は
うくひすの外さふひさもなし

梅薫枕　神田錦子
さも志ひの影かすかなるまくらにも
さやかにかをるのきのうめかゝ

春水　芝田源子
うちかすむ月のかつらの志つくより
ぬるみそめけんささかはのみづ

竹間鶯　吉川國子
年毎にみさりそひゆくくれ竹は
一ふしたかくうくひすのなく

紀元節　中島房子
うれひ山みやゐましけんそのかみを
あふく今日こそかしこかりけれ

野春風　芝田秀子
菜のはなにそてをやすめてぬる蝶の
ゆめおさろかすのへのはるかせ

舟中雪　溝口直子
いさ舟子さをさしはけめふるゆきの
さけぬそのまにわれはみてこん

梅を折りて人におくる　矢野うめ子

あらたまの年は立ちかへりしかどいみじう寒きに鶯の聲待たれぬにはあられごたれこめてのみありしにはや二月の空さもなり侍りぬ今日は朝げを終ふるやがて文机にむかひて好める書さも何くれさなくひもさきけるほごにさこ風の吹きてえならぬ匂ひの入り來れるに心さきめきてやをら庭に下りたちぬ昨日迄知らで過ぎにし梅の蕾大方笑を含みたるが中にはやほころびたるものさへありて人を迎ふる樣なるもいさらうたき花かなさ今更にもてはやして暫時がほど眺め入りしが斯くばかり美しう咲き匂へるものを已れ獨り愛では やさむはっしろめたくまてはを色も香をも知り給ふ君に參らせむさ思ひ引きよせて一枝手折り侍りぬそは君のいたく梅を好みたまへるさまた此花のおく霜にもはた降り積む雪にも堪へてかく咲き出たるなど己れ等の如き物學ひする身にさりてはこよなきをしへさ覺ゆればなむ

兼題
- 三月廿日
  - 歌……硯
  - 文……養蠶を勸む
- 四月五日
  - 歌……花有遲速
  - 文……小學を卒業せし人にれくる文

女鑑第百三號にかゝけたる二月五日兼題早春鶯に天の撰に當りしは東京神田區三崎町一丁目一番地梅原ふで子

十六夜日記講義（五）（女鑑第五十七號のつゞき）

月池閑人

（八）大夫のかたはらさらずなれきつるを、ふりすてられなんなごり、あながちにおもひしりて、手ならひしたるを見れば、

はる〴〵と行さき遠くしたはれていかにそなたの空をながめん。

とかきつけたる、ものよりことにあはれにて、おなじ紙にかきそへつ。

つく〴〵と空なながめそこひしくは道とほくともはやかへりこん。

とぞなくさむる」。

○大夫。は爲守卿なることをさきにいへり。○かたはらさらず。傍をはなれず。○つる。たるの過去のことぞ。○なん。未來をいひあらはすことばにて、こゝなるは係りことばにはあらず。○なごり。とは浪殘の文字などあてゝ、もと浪の岸にうちあげたるが、皆ながらはひかずして、磯のくぼまりたる處などにのこりたるよりいひて、遂にはうつりてかゝる別れのをしまれて心殘りのすることにもいへ

るなるべし。○あながち。さきにいへり。○手ならひ。習字をいひて、手をかきならふをいふ。古今集の序に「手ならふ人のはじめにもしける」など、其他の書にも數多見えたり。されどこゝなるは、たゞかりそめに物にかきつけたるにて、必習字したるにはあらざるべし。たゞ何となくかきすさべるをいへるなるべし。かろく見るべし。○志たはれて戀。しくて。○いかに。いかむかり。○そなたの空。其方のそら、にて今母の阿佛尼がたびだちゆかんとする鎌倉の方の空をいへるなり。○ながめん。茫然として目だゝきもせず、たゞ一方を見つめてうち瞻むるなり。○たる。の下に歌といふことばをはぶけり。○ものよりことに。ほかのものぞとよりはとりわけて。○あはれ。憐の意。○かきそへつ。のつは書き加へぬの過去をあらはせることぞ。○つくゞ。は熟々にて、心をしづめて打案じ、又は物を見きゝすることぞ。○空ながめそ。なそは打けしのことばなり。瞻むる勿れといふことなり。このそはいつも清みてよむべし。濁りてよむはあやまれり。○こひしくは、のはも清みてよむべし、○はや。速に。○かへりこん。還り來らん。○なぐさむる。和ぐと通ひて思ひを紛はすなり。さてこゝはこんにてことぞきれるを、

ぞとうけたり。ぞはかゝりことばにて下のむるにて結びたり。

大意。この一節は大夫爲守卿にわかるゝさまなり。大夫爲守卿まだ年もやう〳〵十三なれば、わが傍をもはなれずして、朝夕馴れ親しみつゝすぐし來たるを、今母に振りすてらんとするその名殘のをしまれて、いと切にうくつらく思ひて、爲守卿みつからかりそめの筆すさびに歌をかきたり、そのうたを見れば、となり。

はる〳〵と云々。遙々と今母の遠く東の方に旅立ゆかるゝが戀しく且かなしくて、後にのこり居て、如何ばかり母のゆかるゝ方の空をながめくらすことならんとなり。

かやうによみてかきつけたる歌を見るに、他の物事よりは殊更に憐に思ひたれば、その紙に母も亦うたをよみて書加へたり。そのうたは、

つく〳〵と云々。あまりに深く思ひいりて、この母のゆくさきなる鎌倉の方の空ばかりながめてはくらすではないぞ、さやうに戀しく思ふならば、たとひ鎌倉より此處まで道は遠くとも、今速に還り來らん。

とかくうたをかきて爲守卿の深く心配するを紛らはしたりとなり。次の一節にはなは律師源承、阿闍梨慶融にわかるゝさまをいへり。

さてかく阿佛尼の「はやかへりこん」とよまれたれど、鎌倉にいたりつきて、またわが故郷にもかへらず、わが子どもにもえあはずして、遂に東にてはかなくなりにけるを今思ひかへせど、なみだもとゞめあへずなん。

（九）山より侍從の兄のりしも、いでたちみんとておはしたり。それもいとこゝろぼそしとおもひたるを、この手ならひどもをみて、又かきそへたり。

あだにのみ涙はかけじたび衣心のゆきて立かへるほど。

とはことゝいみしながら、なみだのこぼるゝを、あらゝかにものいひまぎらはすも、さまぐ\あはれなるを」。あざりのきみは山ぶしにて、此人々よりは兄なり。このたびの道のしるべにおくりたてまつらんとて、出たゝるめるを、此手ならひもまたまじらはざらんやは、とてかきつく。

立そふぞうれしかりける旅衣かたみにたのむおやのまもりは」。

○山。は比叡山をいへり。「世の中に山てふ山はおほかれど山とはひえの御山をぞいふ」と拾玉集に見えたり。また古今集の詞書にたゞ山とのみかきたるはこの比えをいへるなり。又傳敎大師の歌に、「わがたつ杣」といへるより、吾山ともいへり。○侍從の兄。侍從爲相卿の兄。○りし。は律師の字音にて、これは僧官なり。爲相卿の兄源承をさせり。系圖を見あはすべし。○いでたち。出立。○れはしたり。來たり。○ろれも。は律師をさせり。○れもひたるを。たるをはてあるそのつゞまりたるなり。○あだにのみ。かひなきことむかりに、にてむだにむかりなり。○心のゆきて。思ふまゝに、出訴をかなへてといふことなり。○こといみ。は言忌なり。いむとは物忌、いみ淸まはり、などのいみにて、あしきこと、けがれたるものなどを、さくることなり。いみでもりなどもいふは、あしきこと、けがれたるものなどをさけて、淸きところにこもることなり。さて言忌とはことむのいまはしきをさくることをいふにて、俗によき緣起をつくるといふはこのことなり。○あらゝか。は荒々しくすること。○あざり。阿闍梨の字音なり。もと梵音のなまりたるにて、これも僧官なり。こゝは阿闍梨慶融をさせり。系圖を見合すべし。○

やまぶし。僧の野に伏し、山に伏すからいへるなり。すべて僧をいへり。後の山伏といふとはことなり。○このひと〴〵。こゝに居合せたる、爲相、爲守、源承、等。○道のしるべ。導にて、みち案内のことなり。○めるを。のめるは想像のことだ。○まじらはざらんやは。交らはずあらんやは、にてやはは反語なり。されど交らはずには居らぬといふことになるなり。○かりける。かりはくありのつづまれるにて、うれしくありけるなり。けるは上のぞのかゝりを結べり。○かたみに。互に、○おやのまもり。母のわが子の身の上のよかれとのみおもふ心。またなにくれと心をくばりてとりまかなふをいへるにて親の子をまもるをいふなり。古今集の八の巻離別の歌のうちに、「たらちねのおやのまもりとあひそふるこゝろばかりは關なとゞめそ」。

大意。比叡山より、侍從爲相の兄なる律師源承といへる人も、けふの出立の見立せんとて來りたり。其律師も今の別れを、最心細く思ひ居たるに、この今歌などかきすさぶさまを見て、又それに歌を書き加へたりとなり。それもの下に今日の別をといふ意をそへてきくべし。○あたにのみ云々。いま母のたびだち行かるゝ

に別るゝは、かなしくなきにはあらざれども、さりとて、かひなきことばかりに涙はこぼすまいぞ。やがて思ふまゝに出訴をかなへて再びこゝに立かへらるゝ其ほどまでは、といふ意なり。ほどの下にまではとそへてきくべし。

とかやうに歌をかきたるは、言忌をして、よき縁起をつけながらも、かほを見れば涙のこぼれおつるを、母には見せじとて、打しづみては物かなしけれど、荒つぽくものをとやかくいひて、そのかなしさを紛らすを、母よりは見ねてそれやこれやいろ〳〵にかなしきに。なり。こゝにてきりて心得べし。さて言忌のことどいま少しいふべし。何にまれ千代も八千代もと祝ふ席にて、死ぬ、なく、などいはゞ誰かは心地よからんや。松鶴亀など、いのちながくめでたきものによせて、いかであやからんとするに、死ぬ、なくなど、忌はしきこといふべしやは。かゝる言を忌みていはぬが言忌するなり。さてこゝのさま今目のあたり見るが如く、いとあはれなり。源承律師のそのかなしさをしひておしかくして、母にはみせじとするに、母もそれと察したるなど、おしはかられてあはれなりや。阿闍梨慶融の君は山伏にて、此為相、為守、源承などの人々よりは兄にあたれり。此度の旅立の

道案内をして母を送り奉らんとて、出立さるゝ樣子なるに、又このものかくこと に中間入りせずしては居らぬとて、これも歌をかきたり。立そふぞ云々。今母の旅立せらるゝは、如何にもしてわが子供の爲にとての御心なれど、これは兄弟ども互に親の守を賴むなるに、その今母にたちろふてゆくが うれしとなり。

(十)女子はあまたもなし。たゞひとりまて、このちかき程の女院まさぶらひ給ふ。院のひめ宮ひと所うまれたまふばかりまて、心つかひもまことしきさままて、お となしくおはすれば、宮の御かたの御戀しさも、かねてまうしおくついでに、侍從大夫などのことはぐゝおほすべきよしも、こまかまかきつけて、おくに 君をこそ朝日とたのめ故鄕にのこるなでしこ霜にからすな。

ときこえたれば、御かへりもこまやかにいとあはれにかきて、歌のかへしには おもひおくこゝろとゞめは故鄕の霜にもかれじやまとなでしこ。

とぞある。

女鑑第百四號目錄

(明治二十四年八月八日內務省許可 明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二册(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年三月四日印刷
同　年三月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　(電話番號一九四六)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)